

太 玄

太 玄 会

太 玄（会報72号） 目 次

一、あいさつ

笠原聖雲会長……………1

西村東軒理事長……………2

金丸鬼山事務局長……………3

二、第56回太玄会書展

日程表……………4

役員及び各部部长……………4

第56回太玄会書展入賞・入選者……………5

会場風景……………8

審査風景……………9

授賞式・祝賀会風景……………10

謝 辞（山本白鷗）……………11

三、太玄会役員選抜書展

会場風景・講演会……………12

出品者一覧……………13

四、平成27年度総会

資料掲載……………14

総会風景……………23

五、特別企画 田宮文平先生講演……………24

六、第57回太玄会書展

日程表……………34

役員及び各部部长……………34

第57回太玄会書展入賞・入選者……………35

会場・講演会風景……………38

審査風景……………39

授賞式・祝賀会風景……………40

謝 辞（石川珠翠）……………41

七、太玄会所属団体のこの一年の活動……………42

（平成26年10月～平成27年9月）

八、太玄会所属団体の活動予定……………49

九、特 集

日々おもうこと 山本白鷗先生……………50

「ことば」の力 柘植金鶏先生……………45

感 謝 嶋田白染先生……………52

編集後記 広報部

明日への一步を



会 長 笠 原 聖 雲

永年にわたって太玄会のために献身的にご尽力賜りました浅見錦龍先生の訃報の痛みから脱しきれないままに、平成27年度の活動が歩み始めました。

昨年度、50回という節目を迎えた役員展ですが、次なる太玄会への高みを目指して、太玄会役員選抜書展として総括するところと致しました。副題に『過去・現在・未来へ』と名付けましたこの展覧は、故人となられました太玄会草創期の錚々たる先人たちの書に対する並々ならぬ情熱を改めて感じさせてくれました。

現在に生きる私達の作品の中に、そうした先人たちの息吹が脈々と受け継がれていることを感じるにつれ、歴史とは単なる時間の流れではなくて、そこに介在する人と人と

の繋がりにあるのだという意を強く持つこととなりました。歴史ある役員展を閉じざるを得ないという一抹の寂しさはあったものの、受け継いだ私達がまた次の世代に繋いでいかなくってはならない使命を帯びているという意識を共有出来たことが最大の収穫ではなかったかと思っています。

年が改まり、第57回太玄会書展も無事終了いたしました。人は知恵をしぼって文字を作り書を紡ぎ出しました。そうして太玄会は半世紀を超えました。しかし、15団体の知恵を結集して太玄の書を世に問い続ける営みには終わりも休みもありません。次なる一步を踏み出すために一層のご協力とご支援をお願い申し上げ、巻頭のことばと致します。

第五十六回・五十七回太玄会書展・太玄役員選抜書展を振り返って

理事長 西村 東 軒

第五十六回太玄会書展を振り返ってみて特筆すべきことは、何といっても舛添要一東京都知事のご来臨を頂いたことである。

縁あつて知事とお話する機会を得た。その折に東京都美術館において展覧会を実施していることなどをお話した。その後宮負丁香事務局長が、東京都美術館側から知事の太玄会書展視察が決定した旨の連絡を受けたというのが経緯である。

知事は役員の作品から受賞作までを丁寧にご覧になられ、その後美術館の会議室に場所を移し都美術館館長も交え会長と共に意見交換をすることが出来た。知事にとって都美術館は初めての視察であつたようである。

さて、太玄会にとって一番気になることと言えば当然作品の出来についての評判である。理事実行委員以上に大きな作品寸法を認めたことにより、最近では熱意ある作品が多く出品されるようになったと感じるのは私の手前味噌であらうか。

今後、更に各団体が切磋琢磨して個性に溢れ技術力に優れる作品が多数発表できるよう頑張つて欲しい。

次に太玄役員選抜書展であるが、役員展の最後の纏めに相応しい展覧会になつたと自負している。偉大な足跡を残した歴代役員の個性溢れる作品に接することを得、そしてまた田宮文平先生のご講演を頂くなど充実した形で終了することが出来た。役員の先生方に感謝・感謝である。

第五十七回太玄会書展であるが、本年以上に充実を図るべく準備計画し、会期中に日展会員の篆刻家である河野隆先生の講演を開催することができた。また、太玄会役員による解説会、席上揮毫を例年通り実施し、都美術館で同時期に開催中の書道団体と時間調整・告知することにより他団体の解説会・席上揮毫等行事にも積極的に参加できる環境を創り、交流と協力関係が構築できたのである。

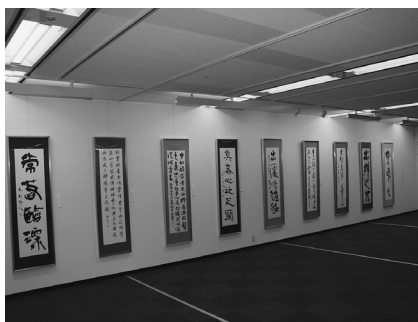
会員の皆様にお願ひとして三年後に控えた第六十回記念展に向け、新たな提案や意見を披露して頂きたいと思う。

事務局長に就任して

平成二十七年四月十九日の太玄会総会に於いて事務局長に任命されました。今迄副事務局長の任にいた折は、常々前事務局長が色々な業務を的確に処理されている姿を見て大変な仕事だな、と思うと共に感謝をしていました。しかし、いざ自分に其れを任される事となり、何をどうすれば等と考える間もなく次々と仕事は飛び込んで来る状況に、この重責に改めて身の引き締まる思いをしました。幸い前事務局長より、きちんと整理された過去の資料を頂き、それらを参考にこの一年間、太玄会の業務を無事に進める事が出来ました。

昨年は平成二十九年度から五年間の都美公募団体募集に関わる審査資料の作成提出。又新しい記名印字式の出品票を導入し、より事務処理の明確化と経費の削減等、会員からの建設的な意見や発想を積み重ねて行かねばなりません。会員の皆様、役員の諸先生の協力が必要不可欠です。更なる太玄会の発展の為先生方より御指導を頂き、事務局一同一丸となり業務に取り組み、微力ながら頑張っておりますので宜しくお願い申し上げます。

事務局長
金丸 鬼山



太玄会役員選抜書展（5月）



総会（4月）



第57回太玄会書展（1月）



第五十六回 太玄会書展役員及び各部部長

名誉顧問	淺見錦龍	理事・総務	石島廻山
名誉顧問	梅原清山	理事・総務	木全珠香
常任顧問	福田丞洲	理事・総務	葛原清峰
常任顧問	田中鳳柳	理事・総務	遠藤有翠
会長	笠原聖雲	監事	高橋心行
副会長	垣内楊石	監事	中田珪川
副会長	石川流芳		
董事	春藤大耿	会計部長	下谷蕪雪
理事長	西村東軒	事業部長	落野祐涯
副理事長	落野雅宣	広報部長	荒井湧山
副理事長	小原天簫	渉外接待部長	石井蕙園
副理事長 事務局長	宮負丁香	役員展部長	小泉興起
理事	猪俣稲果	図録部長	小出聖州
理事	鈴木暎華	搬出入部長	稗田影風
理事	瀧沢曲峰	審査事務部長	飛田冲曠
副事務局長	伊東玲翠	陳列部長	大場大幹
副事務局長	江原見山	褒賞部長	伊場英白
副事務局長	金丸鬼山	祝賀会部長	大河原由佳

第五十六回 太玄会書展入賞入選者

理事の部

太玄大賞(五十音順)

菴澤幸楓(青龍) 嶋田白染(書人) 柘植金鶏(書星)

山本白鷗(九龍)

審査会員の部

太玄賞(五十音順)

岡崎翠晃(高友) 高山爽快(書星) 細田耕仙(研友)

山内紀隆(書人) 山本皓月(真仙)

全日本書道連盟賞(五十音順)

池田紅華(九龍) 高橋興舉(書星) 竹内游月(九龍)

弘田長風(鳥跡) 宮嶋吾風(真仙)

会員の部

特別賞(五十音順)

川本景月(書星) 倉持茜祥(菅菰) 小林まさ子(真仙)

齋藤青巖(燎原) 平崎紅暉(書人)

奨励賞(五十音順)

秋葉雙心(書星) 伊藤桂香(真仙) 太田翠華(書星)

奥井雅苑(真仙) 北嶋蘆園(九龍)

小林桂葉(真仙) 小山君代(書王) 島田芳楠(真仙)
鈴木翠汪(高友) 関 岩鶴(書星) 高島泉遙(書人)
高橋英峰(真仙) 田中映華(九龍) 塚田千鶴(九龍)
土屋春玉(真仙) 中塚貞華(真仙) 成澤攝艶(書星)
拔田紀乘(高友) 畠山春草(九龍) 平川翠宇(高友)
松井華雪(書人) 松ヶ崎浚翠(高友) 望月俊邦(書人)
脇本大幹(九龍)

会員新人賞(五十音順)

阿部敬子(鳥跡) 石井煌醉(高友) 石川翠鈴(九龍)
加藤翠汀(燎原) 川島香竟(書星)
川名僊苑(書星) 杭全松苑(真仙) 倉田柳珠(研友)
高木帝月(九龍) 高崎梅仙(書人)
露木 舞(菅菰) 中川蘭葉(書人) 藤 伸明(書星)
二木眞木(真仙) 三浦利恵(書王)

準会員の部

推 選(五十音順)

荒井珠鶴 池田芳翠 上野正敬 遠藤昌運
大須賀竹仙 菊地将太郎 小山萌生 佐久間輝珠
佐藤美苗 島田峰覧 島村有醉 鈴木一雙
関谷白瑤 常田新葉 土本京月 中澤澄心
芳賀光珠 村田典子 山口杏園 山田松陽

準推選（五十音順）

相木小百合	石井光子	氏家明美	牛尾雅高
江澤とし子	海老沢京香	大河原佳奈	小川美笙
小俣柏翠	垣内楊玄	金瀬櫻艶	上西秀峰
菊地梨祥	木津純子	京増瑞葩	小林翠香
佐藤小暉	佐藤美佐	鈴木竹園	高木芳馨
高橋桃姫	田中萩華	時田大祥	中島翠霽
中村柳華	夏山華川	西岡山州	細萱玲風
松浦珠光	宮下香嶺	宮地豊苑	村山霜紅
茂木朱櫻	家中麗醉	山下栄祥	渡邊翠涼

公募の部

特選（五十音順）

浅田広樹	右近桜月	江上桐佳	榎本華艶
大熊蕙玉	大山堂以	尾崎清爽	小澤雲峰
尾和恵扇	片岡天華	岸美津子	栗原紫翠
小島洋一	坂口白峰	佐々木玉峰	佐藤亮子
佐原美醉	下間佳璋	鈴木滋盛	高橋弘雲
田中さち子	中元玉蘭	西村果仙	宮本祥太
村上静竹	守田禎香	山内聡華	山田圭子
山田桂子			

準特選（五十音順）

石川光寵	石川未来	今泉寛宏	今村春華
------	------	------	------

入選（五十音順）

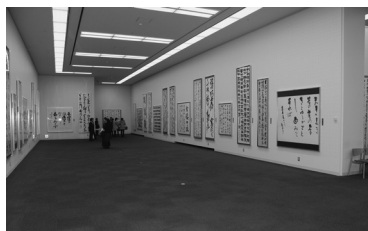
上野桂尚	宇田川翠扇	内田黄鳥	浦崎明美
遠藤紫悠	大嶋瑞禾	岡本清香	小澤洋子
垣内仁美	方波見早子	加藤暉川	鎌形美容
川井韶瑞	川口幸江	川端紫雲	沓澤絵梨
熊谷圭以子	古賀輝煌	後藤紀子	小林宗朝
小林洋子	坂智大	佐藤蒼艶	佐野富雄
猿田浩子	志村幸子	菅沙矢香	杉山雅子
鈴木光鶴	高野恵実子	高橋久美	滝口栄珠
竹花東風	田所佐季	田中元光	玉井香敬
玉村華堂	手川翠鶴	寺澤陽子	遠矢虚圓
中澤桂琇	並木榮楽	西澤厚雪	西端茂
橋本智津	長谷川綵月	林柳阮	原田瑤英
日野緑	平野渚秋	福本明暢	藤田寿仙
藤田晶洋	富士原志紅	細淵金杏	本間雅鳳
本間直人	前田香歌	増井紅翠	増田澄靖
松井芙蓉	宮川彩波	宮澤溪翠	三好須光
山口柊華	油井謙輝	吉田直美	米田恵子
和田光翠	渡辺佳祥		
青木爽游	阿部弘信	荒井逢月	荒原香堂
有馬優葉	飯島綾花	石井茜音	石井梅香
石井宗子	石川清香	石川惺楓	石川青流
石河正道	井出清玉	伊藤佳子	稲生妙子
稲木芳華	井上紀秀	猪又千穂	今村真秀

塚田真由美	田中裕也	竹中光順	高橋蒼功	高内芝蘭	鈴木教子	末永美和	清水享鶴	篠崎文江	沢田信桐	佐藤榮壽	櫻井美津枝	小山千翔	木間幽響	毛塚佳泉	熊谷弘	北田榮逸	川島遙青	柏尾美峰	納村和代	岡田信来	太田君江	瓜田余響	牛口仙桃	岩渕福仙
辻野沙季	田村游古	田嶋慎仙	高橋貞松	高貫千恵	鈴木白明	鈴木麻美	下間果穂	島田昌光	沢田宏子	佐藤摂子	櫻田明道	斉藤光天	小林富子	小泉文代	倉持昌世	木村兆覚	川谷淳一	数本慈雨	小野翠香	小川静子	大谷文華	海老澤豊月	薄木兼子	印南醉豊
津山由佳	丹治克博	田中春曄	高橋幸江	高野房江	添野佳純	鈴木悦子	下間明燈	島津則子	澤田遥焉	佐藤良枝	佐々木清美	齋藤天聽	小林和可奈	小暮兆琳	倉持麗子	功刀曉舟	河原佳子	片山廣楓	小野田子雪	小川悦雄	大野遙佳	大石由香里	内田正子	上野沙耶花
寺崎登美子	段野真希	田中多加代	高橋善栄	高橋希兆	藺田紫苑	鈴木光濟	下原春樹	島美代子	椎霞扇	眞田愛子	佐々木芳華	坂貴大	小松六平	後藤詩織	栗本暁	久保田溪堂	神田接子	川井右京	風間翠泉	奥田叔仙	大山良子	太田和之	梅田香苑	上山範子

渡部富久栄	吉田愛	山田緑水	山井奈々子	宮山美和子	三浦道子	舛田昌玄	古谷幸子	藤原桂子	福田佳子	広澤光香	原田青翠	長谷川正実	二瓶花僊	中山志峰	中込雅恵	豊田光曉	東方陽周
	渡邊絵里	山田緑亭	山浦柚美	宗島余光	三木智加	松澤易山	星游冲	藤原博子	福本澄鮮	深川兆瑤	日色咲麗子	馬場春蘭	根本由紀	南雲鶯草	中西華泉	鳥海佳奈	富岡柰輝
	渡辺千雅	横瀬晃子	山口あずさ	柳澤幸子	三木悠洸	松沢上清	堀井幹子	藤原芳苑	藤崎澄瑩	深野きよ子	膝附史穂	林葵丘	野沢靖舟	夏目恵	中村丹裳	内藤梨紗	富永由夏利
	渡辺仁美	横田よし江	山口政行	矢野松翠	水谷衣里	松村祥風	本間祥雲	古川紫虹	藤田靄香	福岡華泉	平田光空	葉山寿	葩島召泉	西山由苑	中山加津美	長尾和香	豊嶋勇太郎

第56回 太玄会書展 会場風景

平成27年 1月20日(火)～24日(土) 会場:東京都美術館



第1室風景

東京都知事舩添要一氏来場



解説を受ける舩添知事



作品を鑑賞する舩添知事



一点一点を鑑賞される舩添知事



入場時

作品解説と席上揮毫



森 久圓先生



遠藤有翠先生



垣内楊石先生



西村東軒先生



(左) 鈴木暎華先生



中田珪川先生



石川流芳先生 (右)



小出聖州先生



高橋心行先生



海野十方先生



亀ヶ谷深翠先生



中尾勝子先生



稗田影風先生



小泉興起先生



落野祐涯先生



荒井湧山先生

第56回 太玄会書展 審査風景

平成27年 1月14日(水)～15日(木) 会場：東京都美術館



審査2日目



審査1日目



審査員 (全体集合写真)



審査員 (会員賞選考委員)

第56回 太玄会書展 授賞式・祝賀会

平成27年 1月21日(水) 会場：上野精養軒

授賞式



審査報告
審査事務部長 飛田冲曠先生



開会の辞
副理事長 小原天簫先生



理事長挨拶
西村東軒先生



会長挨拶
笠原聖雲先生



太玄大賞受賞者



本年度審査員



運営委員



閉会の辞
副理事長 蔦野雅宣先生



授賞式の風景



太玄大賞受賞者

祝賀会



祝賀会風景



乾杯の発声 読売書法会事務局長
山崎俊滋氏



来賓挨拶 日展理事
清水透石先生



開会のことば
副会長 垣内楊石先生



閉会のことば
副会長 石川流芳先生



祝賀会風景



第五十六回太玄会書展

謝 辞



受賞者代表 九龍社 山 本 白 鷗

第五十六回太玄会書展において栄えある表彰を受けました一同を代表いたしまして一言謝辞を述べさせていただきます。本日、会長様をはじめ審査員の先生方のご出席の上、私どもにこのような盛大な表彰式を挙げていただき、その上表彰状を賜りましたことはまことに光栄でございます。厚くお礼申し上げます。

今後は、この榮譽に報いるよう益々書の研鑽に励み、太玄会の発展に尽くす所存でございます。どうかこれからも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、誠に粗辞ではございますが、ここに受賞者を代表いたしまして心から厚く御礼申し上げます。

平成二十七年一月二十一日

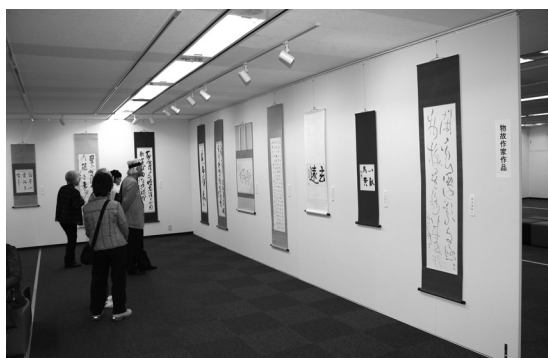
日頃、私どもは書の向上を目指して微力を尽くしてまいりましたが、その努力をお認めいただきはからずもこのように晴れがましい榮譽を得ましたことは、ひとえに会長様はじめ諸先生の厚いご指導、励ましの賜と心から感謝申し上げます。

太玄会役員選抜書展「過去・現代・未来へ」併催：歴代役員物故展

平成27年5月12日(火)～17日(日) 会場：セントラルミュージアム銀座



会場風景



歴代役員物故展

講演会 演題：太玄会の過去・現在・未来 講師：田宮文平先生



講演会場風景

講師 田宮文平先生



お礼の挨拶 理事長 西村東軒氏



抽選による執筆本の贈呈



挨拶 垣内楊石先生

太玄会役員選抜書展出品者一覧

会期 平成27年5月12日(火)～17日(日)
会場 セントラルミュージアム銀座

出品者(敬称略)

梅原清山	福田丞洲	田中鳳柳	笠原聖雲	垣内楊石	石川流芳	春藤大耿
西村東軒	落野雅宣	小原天簫	宮負丁香	鈴木暎華	瀧沢曲峰	伊東玲翠
江原見山	金丸鬼山	石井光華	石島廻山	遠藤有翠	木全珠香	葛原清峰
高橋心行	中田珪川	浅見百意	足達紫鳳	荒井湧山	石井蕙園	石井香村
伊藤慈恩	伊藤紫香	伊場英白	植木蒼穹	上田湘雪	海野十方	大岡蘭仙
大河原由佳	大木秘翠	大場大幹	笠井津仙	風間松翠	片倉道子	鎌田龍祥
上嶋桂風	亀ヶ谷深翠	川端敏江	黒川白嶺	黒田桂泉	小池鱗華	小泉興起
小出聖州	小林紫雲	小林碧桃	佐々木恵陽	佐々木幸葉	佐藤龍聖	下谷蘓雪
志村恵風	白崎芙楊	返町恵風	滝澤聖華	田邊艸水	田村昇鶴	塚田嶺山
飛田冲曠	富久鳴泉	富山虎跑	鳥越新芽	中尾勝子	中元泰乘	並木金紫
南部碧章	西澤厚子	西谷香峰	橋本春溪	稗田影風	落野祐涯	吹原草扇
細谷芳月	前川郷石	増永楊蘭	三上彩風	南溪石	三根揚輝	村松鳳襟
森久圃	山内浪華	山村鳳羽				

総会

平成27年度 総会議案書

日時 平成27年4月19日(日) 午後4時
会場 上野 精養軒

総会 次第

司会者 金丸 鬼山

一、定足数の確認 伊東玲翠

一、開会の辞……………小原天簫

一、常任顧問挨拶……………田中鳳柳

一、会長挨拶……………笠原聖雲

一、議長選出……………田中鳳柳

一、書記任命……………三根揚輝・落野祐涯

一、議事

(1) 平成26年度事業報告……………宮負丁香

(2) 平成26年度決算報告・会計監査報告……………〃

(3) 平成27年度事業計画案について……………〃

(4) 平成27年度予算案について……………〃

(5) 役員改選……………西村東軒

(6) 新審査会員の紹介……………〃

(7) その他……………

一、書記退任……………

一、議長退任……………

一、閉会の辞……………落野雅宣

平成26年度 事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
26.4.21	運営委員会・理事会 平成26年定期総会 懇親会	事業報告・会計決算報告 事業計画案・予算案審議 役員承認・その他	上野精養軒
5.5	第50回記念太玄会役員書展 (特別展示 好太王碑の剪装本) 運営委員会(内覧会)	搬入・陳列 第55回太玄会書展関係	東京セントラル 美術館
5.6	総出品数364点(49回展373点) 入場者数1023名	その他	
5.11	検討委員会 事務局部長合同会議	最終日・作品撤去	
5.7	検討委員会 事務局部長合同会議	第56回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
7.17	運営委員会	第56回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
10.15	検討委員会 事務局部長合同会議	第56回太玄会書展関係	上野精養軒
12.7	第56回太玄会書展運営委員会 理事会	書類搬入 第56回太玄会書展関係 忘年懇親会	上野精養軒
27.1.13	第56回太玄会書展 1/20～1/24	搬入 審査(会員賞選考) 審査 席上揮毫・解説会	東京都美術館
1.14	1/20～1/24		
1.15	9.30～17.30		
1.18	総出品数994点(55回展1076点)		
1.21	第56回太玄会書展	授賞式・祝賀会	上野精養軒
4.8	会計監査		
4.19	運営委員会・理事会 27年度太玄会定期総会	懇親会	上野精養軒

第56回 太玄会書展出品状況

☆総出品点数 994点

18	名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員
7	理事総務 監事
65	理事 実行委員
106	理事
165	審査会員
114	会員
228	準会員
292	公募

第56回 太玄会書展入賞状況

4	太玄賞
5	太玄賞
5	全日本 書道 連盟賞
5	特別賞
24	奨励賞
15	会員 新人賞
20	推選
36	準推選
29	特選
74	準特選
189	入選

※入場者数 3,045名

事務局各部活動状況報告

◎事務局 (担当 副事務局長 伊東玲翠 江原見山 金丸鬼山)

26・2 定期総会のお知らせ

5 新役員決定挨拶状

10 運営委員会・理事会、忘年懇親のお知らせ

以上の資料作成と発送業務

◎会計部 (担当 下谷穂雪)

26・4 平成25年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

総会に向けて平成25年度の決算書、並びに平成26年度の予算案作成

平成25年度会計監査実施

平成26年度総会 決算書、予算案報告 総会受付補助

第50回記念役員展 予算案作成、運営委員会に提示 会期中の必要経費の準備

平成26年度各社中へ会費納入に関する書類並びに依頼書を送付

5 第50回記念役員展開催 会期中の必要経費支払業務実施

6 平成26年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

7 会費領収書を各社中へ送付

10 第56回太玄会書展に関して各部の行動予定の把握。行動費、経費の算出

資金の準備

第56回太玄会書展書類搬入時の準備

12 第56回太玄会書展の予算案作成、運営委員会に提示

平成26年度理事会忘年会 会費納入受付 公募出品料集計確認

第56回太玄会書展必要経費準備

27・1 第56回太玄会書展審査会に於ける手当及び経費支払い業務

第56回太玄会書展授賞式、受賞懇親会の諸経費準備支払業務

2 第56回太玄会書展の収支報告書作成

3 平成26年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理

平成26年度決算書、平成27年予算案作成

平成27年度総会準備

◎事業部（担当 落野祐涯）

- 26・4 プライバシー封筒、A4・B5・長3作成
- 5 萬印堂へ第56回太玄会書展出品規定、出品表の原稿を送る。
出品名簿等A4に作り直し（内容変更）（5／8）
アオキへ名札作成発注 名誉顧問4、副理事長1、理事実行
委員10、新会員28（5／8）
- 7 役員展部―小泉先生、搬入部―稗田先生へ印を送る（5／8）
宮負先生にポスター・ハガキ・出品規定等を送る7／9返却
（7／5）
萬印堂よりポスター・ハガキ等初校届く（7／15）
運営委員会会議用、出品規定・出品票15組精養軒へ（7／16）
萬印堂へ出品規定・出品票・内申名簿・ポスター・当番審査
員の原稿を送る（7／22）
宮負先生へ出品規定・ポスター・ハガキ・招待券原稿を送る
（7／22）
萬印堂へ各社一覽表・挨拶文を送る（7／29）
8 宮負先生より都美術館申請の件OKの指示 萬印堂一次発送依
頼（8／14）
第一次分届く（8／30）
9 笠原先生に賞状作成の確認（9／11）
第二次分届く（9／25）
10 萬印堂より納品書・請求書届く（10／6）
11 笠原先生より賞状原本届く（11／2）
マイク購入二台（11／17）
12 杉本先生に賞状郵送（12／1）

27・1 各社中の役職札の手配（1／8）

都美術館に備品搬入（1／13）

賞状の手配（1／15）

年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

◎広報部（担当 荒井湧山）

26・4 定期総会

5 第50回太玄会役員書展 写真撮影（会場風景）

9 原稿依頼

部長会にて会報第71号の構成計画を報告

9／11 会報第71号の編集

（役員・第56回展の入賞・入選者リスト、役員展出品者、総
会議案書、事業報告等）

原稿依頼―（会長）笠原聖雲先生（理事長）西村東軒先生（事
務局長）宮負丁香先生

（特集）石島廻山先生、大場大幹先生、志村恵風先生、退町
恵風先生、富山虎跑先生、小泉興起先生、各団体事務局担当

会報原稿を萬印堂へ依頼

第1／3回校正

会報第71発行、各社中へ発送

12 理事会・忘年会にて会報第71号の紹介

27・1 第56回太玄会書展（審査、会場風景、授賞式、祝賀会）写真
撮影

◎渉外接待部（担当 石井蕙園）

26・4 第50回記念太玄会役員書展 案内状宛名シールを作成
各店舗店頭に置く案内状発送

案内状各関係団体に発送

- 11 第56回太玄会書展 祝賀会招待状の文面確認し萬印堂に印刷依頼

- 12 住所シール作成し案内状発送、祝賀会招待状の発送

- 27・1 祝賀会最終確認をとり席次表の作成、席次表・席札の設置を精養軒に依頼

祝賀会来賓者の受付

◎役員展部 (担当 小泉興起)

- 26・10 検討委員・部長会議において27年度の役員展は物故作家と現役役員と合同にて開催することを決定

- 11 物故作家を選出し作品の借用を依頼

会期中に田宮文平先生による講演会を開催することを決定
平成27年5月16日(土)午後3時より 於同会場

- 12 要項・出品票等必要印刷物を風雅プランニングに発注

理事実行委員以上の出品資格者を確認し、要項・出品票を個別に送付(94名)

- 27・1 各社中事務担当宛「社中出品者名簿」を送付し、2月28日迄に出品、不出品の確認を依頼

- 27・3 物故展の作品が写真撮影のため風雅プランニングに納入されたか確認

選拔展の作品が表具店に依頼されたか確認(全員 半切額装)
出品点数を最終確認し、案内状・封筒・招待券の作成を依頼
— 風雅プランニング

- 4 案内状・封筒・招待券を各社中に送付
陳列、撤去作業を依頼— 牧野商会

- 5 5月11日(月) 陳列

5月12日(火) 17日(日)会期

5月17日(日) 終了後搬出

◎図録部 (担当 小出聖州)

第50回記念太玄会役員書展作品集

- 26・3 作品撮影(364点)と編集 風雅プランニング

図録発送先調査

- 3 3 発行部数と発送先まとめ

一回目、二回目校正

- 5 図録発行

申込書により各社中へ発送 会場へ納品 風雅プランニング

第56回太玄会書展作品集

- 26・10 図録の係わる基本方針の作成

- 27・1 作品撮影 460点 風雅プランニング

(審査会員以上360、会員受賞者44、準会員受賞者56)

- 1 1 編集 風雅プランニング

- 2 2 一回目、二回目の校正

図録発送先調査

発行部数と発送先のまとめ

- 3 図録発行

申込書により発送 風雅プランニング

◎搬入出部 (担当 稗田影風)

- 26・10 書類搬入案内書を社中事務担当者に発送

(会計部より受領の払込取扱票同封)

招集通知書を搬入部員に発送

12

(書類搬入日・作品搬入日・事務作業の説明書)

書類搬入日 事務の実施

書類搬入の受付

社中持参の出品目録等の書類集約

社中別出品者数表の全体表作成

出品者数を理事会にて報告

引き継ぎ事項

審査事務部長に出品者名簿

会計部長に当日納入の出品料

事務局長に出品者名簿・資格別作品出品数一覧表

陳列部長に出品者名簿・作品型式調査票・資格別作品出品数

一覧表

その他、担当者に配布

27・1

作品搬入日 事務の実施

作品搬入の受付

搬入数の確認・確定(表装店9社より持ち込み)

役職別・社中別数の確認(社中別出品者数表参照)

作品搬出日 立会の実施

作品搬出の受付

搬出数の確認・立会(表装店9社の引き取り)

◎審査事務部 (担当 飛田冲曠)

26・12 第56回太玄会書展の書類搬入確認(12/7)

・審査事務部処理について打ち合わせ

27. 1 ・第56回太玄会書展審査事務部打ち合わせ、役割分担説明

(1/13)

・審査手順、作品配置について打ち合わせ

・作品、994点確認 ・審査場作成

・作品配置 ・成績処理の打ち合わせ

・出品者目録校正

・審査方法打ち合わせ、役割分担確認(1/14)

・風雅プランニングと打ち合わせ

・会員賞選考委員による審査

会員新人賞の選考審査

特別賞、奨励賞の選考審査

太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査

太玄大賞の選考審査

・入賞者代表謝辞選出

・選考委員集合写真

・選考委員及び当番審査員による審査(1/15)

・推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査

・選考委員及び当番審査員集合写真

・作品管理、成績名簿作成 ・褒賞部へ連絡

◎陳列部 (担当 大場大幹)

26・10 各社中に陳列人員の依頼書類を送付

12 搬出入部より社中別出品者名簿、名札(準会員、公募)を受

け取り出品点数を確認

牧野商会に点数(994点)を連絡、見積もりを依頼

各社中の準会員、公募の名札を確認

陳列原案を作成

副部長、委員に書類を送付

27・1 搬入日 副部長と打ち合わせ、会場の確認

牧野商会と打ち合わせ

準会員、公募作品と名札の確認

陳列日 総人数約70名、3時半に終了

初日 副部長と名札、賞状等の確認

最終日 名札等の取り外しと整理

◎褒賞部 (担当 伊場英白)

26・12 精養軒担当者との打ち合わせ 書類の作成・整理・確認

リボン・事務用品の確認と補充

松下徽章へ賞品のメダル発注

野口商店へ賞状入れの筒発注

額 (太玄大賞・太玄賞分) 発注

事業部へ賞状の発送依頼 (揮毫者宛)

27・1 各社中へ受賞代表者申告用紙配布、集約

代表者名簿の作成

呼名簿の依頼 (審査日)

賞状の揮毫、確認

会場案内図、席次表作成・印刷

賞状・賞品等各社中へ発送

式次第の依頼

授賞式運営

◎祝賀会部 (担当 大河原由佳)

26・11 各社中の事務担当者に依頼書 (祝賀会出席者希望数・リボン

送付先住所氏名)、

振込用紙を送付 (11/25)

12 従来通り立食パーティー、当日受付ありで行います。

精養軒と打ち合せ (12/7)

27・1 委員に書類送付 (12/24)

当日までの準備

・出席人数把握

・会場納入確認

・次第の確認

・書類作成

・看板 (舞台上の確認)

・リボン確認

・案内表示作成 (揮毫スタンド用社中名表示、テーブル拡大

表示、当日来賓受付表示、控室案内表示)

各社中に出席者数リボンを指定先に送付 (1/10)

精養軒と最終打合せ (1/15)

人数・テーブル数、進行等

11時00分 部長・副部長・委員集合、打合せ (1/21)

11時30分 仕事準備

12時00分 当日受付開始

13時00分 会員入場

13時15分 来賓入場、祝賀会開会

14時55分 祝賀会閉会

15時00分 会員退場

出席者数 申込み 245名

来賓 35名

当日申込み 24名

合計 304名

平成27年度 事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
27.4.19	運営委員会・理事会 平成27年定期総会	総会関係・第57回太玄会書展 当番審査員決定方法・日程 その他の確認 事業報告・会計決算報告 事業計画・予算案審議	上野精養軒
5.11	太玄会役員選抜書展 運営委員会（内覧会）	搬入・陳列 第57回太玄会書展関係・当番 審査員について・その他 初日	セントラルミュ ジウム銀座
5.12	太玄会役員選抜書展	田宮文平 先生による講演会 最終日・作品撤去	
5.16			
5.17			
5.13	検討委員会 事務局部長合同会議	第57回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
7.15	運営委員会	第57回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
10.14	検討委員会 事務局部長合同会議	第57回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
12.6	第57回太玄会書展運営委員会 理事会	書類搬入 第57回太玄会書展関係 忘年懇親会	上野精養軒
28.1.13	第57回太玄会書展	搬入	東京都美術館
1.14	1/20～1/24		
1.15	1/17～1/30		
1.18		休館日	
1.19		陳列	
1.24		最終日 授賞式・祝賀式	上野精養軒
4月上旬	会計監査		
4.17	運営委員会・理事会 28年度太玄会総会	懇親会	上野精養軒

平成27年度 役員構成

名誉顧問	梅原 清山		
常任顧問	福田 丞洲	田中 鳳柳	
会長	笠原 聖雲		
副会長	垣内 楊石	石川 流芳	
董事	佐渡 壽峰	春藤 大耿	
理事長	西村 東軒		宮負 丁香
副理事長	落野 雅宣	小原 天簫	
事務局長	金丸 鬼山		
副事務局長	伊東 玲翠	江原 見山	伊場 英白
運営委員	小出 聖州		
	笠原 聖雲	垣内 楊石	石川 流芳
	西村 東軒	落野 雅宣	小原 天簫
	宮負 丁香	金丸 鬼山	鈴木 暎華
	瀧沢 曲峰	伊東 玲翠	江原 見山
	伊場 英白	小出 聖州	
理事・総務	石井 光華	石島 廻山	遠藤 有翠
	木全 珠香	葛原 清峰	
監事	高橋 心行	中田 珪川	
理事実行委員	浅見 百意	足達 紫鳳	荒井 湧山
	石井 蕙園	石井 香村	伊藤 紫香
	伊藤 慈恩	菴澤 幸楓	植木 蒼穹
	上田 湘雪	海野 十方	大岡 蘭仙
	大河原由佳	大木 秘翠	大場 大幹

理

事

笠井 津仙	鎌田 龍祥	川端 敏江	小池 鱗華	小林 碧桃	佐藤 龍聖	志村 恵風	滝澤 聖華	塚田 嶺山	富久 鳴泉	中尾 勝子	南部 碧章	橋本 春溪	吹原 草扇	増田 山酆	南 溪石	森 久圃	山本 白鷗	會田 春燕	浅香 麗芳	石井 珠翠	板垣 芳蘭	岩井 壹龍	植村 曉恵
風間 松翠	上嶋 桂風	黒川 白嶺	小泉 興起	佐々木恵陽	嶋田 白染	白崎 芙楊	田邊 艸水	柘植 金鶏	富山 虎跑	中元 泰乘	西澤 厚子	稗田 影風	細谷 芳月	増永 楊蘭	三根 揚輝	山内 浪華		青木 芳涛	新井 清玉	石黒 自耕	伊藤 桐花	岩谷 小丘	馬居 汀香
片倉 道子	亀ヶ谷深翠	黒田 桂泉	小林 紫雲	佐々木幸葉	下谷 蘓雪	返町 恵風	田村 昇鶴	飛田 冲曠	鳥越 新芽	並木 金紫	西谷 香峰	落野 祐涯	前川 郷石	三上 彩風	村松 鳳襟	山村 鳳羽		赤堀 高峯	池田 静心	石坂 翔鳳	伊藤 遙山	上杉 玉梢	浦田 楊月

大木 曉峰	大畑 晃翠	垣内 玉華	川谷 淳子	久保田芳仙	栗田 伯陽	小宮 柳岱	齋藤 孤芳	里中 光陽	下村 清子	杉本 英華	須藤 恵鑒	田上 洋香	田中 恵康	田村 麦浪	中垣 郁芳	中森 茶月	長谷川香濤	林 韶舞	原田 彩翠	藤岡 悠苑	堀 桃泉	松尾 蘭月	御園生溪鳳	宮本 芳秀
大櫛 一峰	大森 鳳城	勝又 慶竹	河野 里遊	倉田 桂華	小泉 香園	小山 泰雲	桜井 玉苑	清水美代子	末永 照英	鈴木 恵理	清宮 白鷺	宝田 暁蓮	田中 盛觀	坪川 九翠	中西 甫子	西澤 翠香	長谷川流祥	林 鳳仙	落野 研涯	古谷 善子	堀越 壽富	松島 恵風	蓑 青松	三好 凌香
大窪 昇鶴	岡島 順子	加藤 径石	菊野 白濤	倉持 栄秋	小堀 薜穗	近藤 寿泉	笹井 芝雪	下島 東僊	杉浦 華英	須田 瑞兆	高橋 心華	田代 澄暎	田中 柳惲	徳永みや子	中村 藤香	長谷川溪華	花澤 雙鴻	林 幸恵	福田 節子	星野 遙涯	真岸 京湖	松田 爽花	宮原 真玄	村井 藍瑛

第56回太玄会書展入賞により昇格された方々

理事へ10名

審査会員へ13名

会員へ15名

準会員へ30名

山口 香葉	山崎 寛齋	山崎 琇園
山崎 翠嵐	山崎 洋子	山下 玉水
山田 春壽	山田 騰沸	湯浅 瑞雲
吉岡 綏雲	吉田 景雲	吉田 恵子
米倉 暁芳	渡部 越愁	渡辺 玲雲

池田 紅華	岡崎 翠晃	高橋 興舉	高山 爽快
竹内 游月	弘田 長風	細田 耕仙	宮嶋 吾風
山内 紀隆	山本 皓月		

川本 景月	倉持 茜祥	小林 桂葉	小林まさ子
齋藤 青巖	島田 芳楠	鈴木 翠汪	関 岩鶴
田中 映華	塚田 千鶴	平川 翠宇	平崎 紅曄
松ヶ崎 浚翠			

荒井 珠鶴	牛尾 雅高	小林 翠香	佐藤 美苗
島田 峰寛	高木 芳馨	常田 新葉	土本 京月
中澤 澄心	中島 翠霽	夏山 華川	宮下 香嶺
村田 典子	山口 杏園	山田 松陽	

今泉 寛宏	今村 春華	宇田川翠扇	榎本 華艶
遠藤 紫悠	大熊 蕙玉	大嶋 瑞禾	大山 堂以
岡本 清香	尾崎 清爽	片岡 天華	沓澤 絵梨
小島 洋一	小林 宗朝	佐藤 亮子	佐原 美醇
下間 佳璋	鈴木 滋盛	高野恵実子	高橋 久美
竹花 東風	寺澤 陽子	遠矢 虚圓	長谷川 綵月
林 柳阮	原田 瑤英	日野 緑	村上 静竹
油井 謙輝	米田 恵子		

平成27年 事務局構成

事務局長	金丸 鬼山	江原 見山
副事務局長	伊東 玲翠	小出 聖州
伊場 英白		
伊藤 慈恩		
石井 蕙園		
荒井 湧山		
下谷 蘓雪		
路野 祐涯		
路野 祐涯		
石井 蕙園		
伊藤 慈恩		
稗田 影風		
飛田 冲曠		
大場 大幹		
小泉 興起		
大河原 由佳		

平成27年度 総会・懇親会風景

平成27年4月19日(日) 会場：上野精養軒

総会風景



議長 田中鳳柳先生



開会の辞 小原天簫先生



常任顧問挨拶 田中鳳柳先生



会長挨拶 笠原聖雲先生



総会風景



司会進行
事務局長 金丸鬼山先生



閉会の辞
副理事長 落野雅宣先生



審議の内容に聞き入る参加者



懇親会風景



懇親会風景



開会の辞 副会長 垣内楊石先生



閉会の辞
運営委員 瀧沢曲峰先生



懇親会風景



乾杯の発声
常任顧問 田中鳳柳先生

特別企画

太玄役員選抜展記念講演

平成27年5月16日(土)15時開始 会場・セントラルミュージアム銀座

田宮文平先生講演 「太玄会の過去・現在・未来へ」

○講師紹介

昭和12年、東京都生まれ。書評論家。美術書などの編集者を経て、近代・現代の書学、書道史、書評論の執筆を中心に活躍。著書に『吉田苞竹』（西東書房）『評伝 金子鷗亭』（共著、毎日新聞社）、『現代の書』の検証『現代の書』の検証2』（芸術新聞社）、『書・二十世紀の巨匠たち』（天来書院）『書―戦後六十年の軌跡』（監修）（美術年鑑社）他

○はじめに（垣内楊石先生あいさつ）

本日はご多用の中、田宮文平先生にお越しいただきましたことを深くお礼を申し上げます。田宮先生は、書道界の流れを戦前、戦後、そして現代にわたり幅広く見てこられました。そして、全国各会派とのつながりを持たれ、日本の書道界を牽引されてこられた貴重な存在の方であります。その田宮文平先生のご経験、ご見識に触れる機会を得られましたことを皆さんとともに喜び、一緒に清聴させていただければと存じます。本日はよろしくお願い申し上げます。

○講 演（田宮文平先生）

田宮文平でございます。只今過分なご紹介をいただいて大変恐縮し

ています。名門太玄会の講演会にお招きいただいて感謝しています。それにしても今日は大盛会ですね。（笑）こんなに多くの方がお集まりいただいて正直緊張しています。今日は基本的にお手元に配られているレジュメに従ってお話をしようと思います。

最初から生臭いお話になって恐縮けれども、今、日展を巡って書道界がどうなるのか、もしかしたらつぶれるんじゃないかという厳しい状況に書道界が晒されております。50年以上も前のことで、太玄会が成立した経緯というのを簡単に言うのと日展抗争の中から成立したということです。そういう経緯から考えても、原点として戦後の書道史をきちんとおさらいしておく方がわかりやすいと思います。今日は、お配りしたレジュメに太玄会の成立までの経緯を纏めてみました。

1 太玄会成立までの書（壇）の潮流

(1) 日本書道美術院「昭和20年成立」

戦後（昭和20年12月8日）、いち早く日本書道美術院が立ち上がります。これを主としてリードしたのは戦前の展覧会でいうと泰東書道院、大日本書道院、三楽書道会でした。唯一、東方書道院が少し立ち遅れて成立いたします。これが後々までいろいろな意味で影響を及ぼすこととなります。まあ、おそらく東方書道院は吉田苞竹という方が亡くなられた影響が大きくて、松本芳翠先生（1893～1972）、川村麒山先生（1882～1969 静岡県生、昭和20年に戦禍を避けて信州篠ノ井へ疎開したのが縁でその後の基盤となる）がいましたがあまり政治的に活躍できる立場の方ではなく、唯一、辻本史雲先生（1895～1957 奈良県生）が関西で旧東方系を樹立していました。戦前までは、関西は東京に所属して活動していた

のですが、なぜかと言うと、戦争中に大日本書道報国会というのがあり、その関西支部長を担っていたのが辻本雲先生だったのです。おそらく関西支部長という地位がなかったら関西を一本化することは出来ません。非常に先を見ることの出来る辻本先生でしたので、これを機会に東京に振り回されるよりも関西を樹立しようと考えられて、今日の日本書芸院が誕生したわけです。おそらく辻本先生の頭にあったのは日本画の東の横山大観先生（1868～1958 茨城県水戸市生、日本画壇の重鎮、東京美術学校1期生、西洋画の画法を取り入れ新たな画風を研究）、西の竹内栖鳳（1864～1942 日本画家、京都画壇の代表、近代日本画の先駆者）という二極体制を書道界でもお考えになって日本書芸院を創設されたのではないかと思います。そこで日本書道美術院が急遽出来るわけですけど、何しろ一辺に大同団結したわけですから、いろいろな会派の方が入っていて審査をすればなかなか意見が一致しない。例えば、仮名部で町春草先生（1922～1995 飯島春敬に師事）が最高賞になると、天来系の先生は納得がいかないということですのですぐに分裂してしまいます。

(2) 書道芸術院「昭和22年成立」

そして、書道芸術院が昭和22年（11月23日）に結成されますが、この時に主としてこれをリードしたのが手島右卿先生でした。また、資金は香川峰雲先生ご夫妻と繋がりがあった当時衆議院だった中村庸一郎代議士より「戦争に負けたからといって独自の文化を失うのは情けない」と、多額の資金援助を得ることで創立することとなります。でもこれがまた審査をやってみると、旧東方系の平尾孤往先生や津金雀仙先生がなかなか大日本系の天来系の先生方の美意識が合わない。特に書道芸術院は大澤竹胎、大澤雅然の兄弟が敏腕を振るっていました。

特に大澤雅然は農民文学出身の方で、独特の理論でひとり取り仕切っている状況でした。

(3) 日本書作院「昭和25年成立」

そのような内情ですから上田桑鳩先生もおもしろくなく、奎星会の手島右卿先生、津金雀仙先生も大澤雅休先生の考えにはとても付いていけないということで日本書作院を昭和25年に作ります。（※これは浅香鐵心先生が率いた日本書作院とは別団体です。）ですがこれも展覧会を開いてみると、伝統系と現代系がそれぞれの芸術観を主張しますが、やはり考えが一致しませんでした。

4 回瀾会と独立書道会「昭和27年 同時成立」

そこで昭和27年、日本書作院はついに回瀾会と独立書道会に分裂いたします。独立書道会では手島右卿先生、徳野大空先生、山崎大抱先生などがリードしていくのですが、これは現代系が一本化したため非常にスマートな体制になりました。そして、回瀾会は鈴木翠軒名誉会長、平尾孤往会長、津金雀仙副会長を立てることで、これまで立ち回っていた東方系がここで上手くまとまることになるのです。この時に回瀾会の旗振り役を担ったのが中台星陵、私の実の父親でした。当時、会長に誰を立てるか考えた末、平尾孤往先生には社中がなくお弟子さんがいないため一番収まりがいいということで会長になっていただき、回瀾会が成立しました。

その頃、私の家は小石川にありましたが戦争で焼けなかったこともあり、よく回瀾会の会合が開かれ、平尾孤往先生も度々お見えになりました。私は、子どもながら平尾先生のことを高貴な文人だなと強く感じていました。2階の部屋で会議が終わるとお酒が出るのですが、何時、平尾先生が箸を付けるのか、よく覗きに行ったものでした。平

尾先生は、最後まで箸を付けないんですね。姿勢をきちつとされて、お酒をスーッと飲まれる。こういう先生でございました。

このようにして回瀾会は鈴木翠軒先生、平尾孤往先生、津金霍仙先生という文人肌の書家によって纏まったわけです。そこに赤羽雲庭先生が加わりましたので、さらに旧東方系も文人系が集まることでしっかり纏まるのではないかと普通は誰もが思います。ところがここで予期せぬ事が起こってしまうのです。一つは、昭和29年に次期芸術院会員と目されていた辻本史邑先生が若くして急逝されてしまいました。そこで豊道春海先生が次の芸術院会員に是非、西川寧先生を擁立したいとおっしゃったのですが、芸術院会員というのは、書では当時2名しかいませんでした。とにかく日展で絶大の権力を振るっているわけですから、同門から2名と言うことは考えられないと言うことで反対運動が起こります。西川先生は人物・識見共に優れている人ではありますが、同門2名は望ましくないということで、はじめは反対側も特定の人物を擁立しないで見送って欲しいと説得するのですが、豊道先生は最後まで納得されず、結局は戦争状態になってしまったのです。

結局、昭和35年に鈴木翠軒先生を芸術院会員に擁立することになったのです。そして、鈴木翠軒先生が芸術院会員になられることで次第に書の最高指導者になっていきます。それまでの鈴木翠軒先生は、「ノイリゼ翠軒」と言われ、書道界の政治的な場面には一切出なかった人でした。ところがその後、豊道春海先生も会を退いてしまわれまして、日展の常務理事として権力が集中することになっていくのです。となりますと、回瀾会も静かに書だけやっていくという状態ではなくなってしまうのです。

(5) 日展の三本柱の動向

当時の日展は、審査員クラスが多くなる謙慎書道会、関西、回瀾会が3本柱でありました。元々謙慎書道会は一枚岩の団体、また関西も当時は新幹線がなかったので熱海で一泊して統一見解を纏めてくる、となると特選の多数派工作に介入されるのは常に回瀾会であったわけです。また、平尾孤往先生（戦前まで中国では少数民族を意味する「白海」と言う号をつけていたが、戦後は本名の「鋼」の音を取って「孤往」と名付けた）は純粹な文人路線の方でもいらっしやいました。回瀾会が日展の主流になることで平尾孤往先生を中心に青山杉雨先生、赤羽雲庭先生による3人組というのが成立し、この3人で日展を上手く纏めていくという事になりました。ただ、平尾孤往先生にはお弟子さんが一切いません。何とかこの3人組で日展を盛り上げるためにも弟子がいなかったら不自由だろうと言うことで、是非門下をお取りになつてはどうですかと赤羽雲庭先生や青山杉雨先生からも勧められたようです。当時、回瀾会の内部でも阿部鉄蕉先生、浅香鐵心先生、そして吉澤鐵石先生などにもわかに平尾孤往先生を担ぐわけです。

(6) 太玄会結成の経緯 [昭和35年]

このようなことから回瀾会では、鈴木翠軒先生は芸術院会員で絶対的な権力を振ることとなり、平尾孤往先生も日展の運営に取り組んでいきます。ということで、当初掲げた比較的静かに書に取り組んでいくという路線から次第にはずれていくこととなりました。このような状態が積み重なっていくうちに、回瀾会の中にも在野系の人もいました（私の父も日展も毎日やらないうちに、回瀾会の中にも在野系の人もいました）ので、回瀾会の中での問題でいくら揉めても構わないけれども、日展や毎日展の問題で揉めるのは困る、そういう人たちは出て行ってくれと言ひ出す

人たちも出てきました。そこで、平尾孤往先生、赤羽雲庭先生をはじめ阿部鐵蕉先生、浅香鐵心先生、吉澤鐵石先生等を中心として日展を中心に活動していくことを目標に新しい会を作ろうと言うことになりました。そこで成立したのがこの太玄会なのです。

(7) 平尾孤往先生、赤羽雲庭先生の離脱

とはいえ、関東最大の謙慎書道会、そして関西とのやりとりが変わるわけではありません。回瀾会が日展のことで揉めたのと同じように、太玄会の内部でも揉めるわけです。そこで元々純粹な文人的なお人柄だった平尾孤往先生が、とうとう耐えられなくなりお辞めになるわけです。太玄会を辞めるだけでなく、完全に書道会から離れてしまいました。私は子どもの時から存じ上げていましたので、書学についても教えていただくなどお世話になったのですが、たまに電話をすると「私は書道会から離れたのだから減多なことで電話をしないでくれ」と言われたこともありました。その後、赤羽雲庭先生も太玄会から離れることとなり、太玄会は大変困った状態になりました。

(8) 会派互恵の運営

太玄会は、日展をやつていこうと言うことで成立したわけですが、太玄会が成立した昭和35年の第3回日展で当時の応募数が1,392点、入選が365点となり、その年に浅見錦龍先生が特選をお取りになります。そして昭和36年の第4回展では、文部大臣賞に赤羽雲庭先生の「凜巖」が受賞、そして浅香鐵心先生が特選に受賞されます。また翌年、昭和37年の第5回日展では、津金孝邦先生が特選を受賞されました。昭和38年の第6回展では、特選はありませんでしたが、翌年の昭和39年の第7回展では、鈴木景堂先生が特選を受賞されます。この年の応募数は2,042点、入選が699点と今では信じられない

数字となっています。このように日展が盛んになっていく過程で太玄会の結成当初は大きな成果をあげていました。

それ以降、日展では現在理事長をお勤めになっている西村東軒先生が平成14年の第34回展、平成16年の第36回展で特選を受賞され、平成24年の第44回展で審査員に就任されましたが、これまでの間、日展では特選受賞者はありません。

そこで昭和40年代以降、太玄会の先生方は日展抗争に巻き込まれるよりは、相互に仲良くやつていこうという考え方に変わってきたのではないかと思います。当時10以上の会派がありましたが、当時の資料を読むと仲良しクラブになったと書かれたものもあります。これはこれでいろいろ苦労された挙げ句、会全体を考えた末の智慧として理解出来ます。しかし、一方で仲良くやるのはいいことですが、一方で緊張感が緩むということで、これからの太玄会をどうしたらよいかという懸念の声もあがってきました。

ちなみに日展のその後について紹介しますと、昭和41年第9回の日展で応募が3,176点とさらに増大します。当時、公募展で3割入選が確保できなかったらきちんとした審査は出来ないという意見も「書品」に掲載されています。とにかく各団体は、自分の団体の入選を確保するだけで精一杯だった訳です。この年、現在日展理事の新井光風先生が初入選いたします。また、翌年の昭和42年の第10回展では、現在日展顧問の日比野光鳳先生が初入選いたします。このようにみていくと歴史というのは非常に興味深いものだと感じます。一方、太玄会がだんだん日展中心ではない考え方に傾いていく中で、特選を取られた浅香鐵心先生や津金孝邦先生はそれぞれの会の中で日展中心の活動をするため脱退していきます。また、せっかく特選をお取りになった

鈴木景堂先生は、その後日展に出さなくなりました。このような経緯から、太玄会は日展を中心とするのではなく、太玄会は協調して仲良くやっていこうという方向になっていきます。

2 戦後書壇の上部構造

ただ、改めて考えてみると戦後の書道界の特徴として、昭和23年に日展（第五科として書部門が加わる）と毎日書道展（前身は全日本書道展）が設立され、各書道団体の上部に位置する形で君臨することになります。各団体は、日展と毎日書道展とどのように距離感を置くかで大変苦労いたします。関西は毎日書道展には一切出さないという空気がありましたので、金子鷗亭先生などが何とか繋げるために苦労されていきました。

3 戦後の書思想

〔伝統派〕(1) 守旧派

次に戦後の書思想についてですが、豊道春海先生（1878～1970）天台宗の僧、書家。西川春洞に書を学び泰東書道院設立（1930）、戦後は日本書道美術院の創立や日展五科の設置に尽力）や尾上柴舟先生（1876～1957）歌人、書家、国文学者。「平安朝時代の草仮名の研究」著）は戦前からの守旧派として考え方を基本的に変えないでいきます。

(2) 明清派

村上三島先生（1912～2005）片山萬年、辻本史邑に師事）や殿村藍田先生（1913～2000）豊道春海の師事。等は明清派という明末清初の王鐸や傅山等の書風を長条幅に取り入れていこう

という考えの方たちです。

(3) 碑学派

また、碑学派は昭和24年に「書品」が創刊されて、主幹に西川寧先生（1902～1989）、松井如流先生（1900～1988）が就任されて清朝書学について紹介してしていきます。当時、昭和20年代の西川寧先生はご自分を学者であり、書家だとはおっしゃいませんでした。ですから当時のいろいろな写真を見ると、書家の集合写真では豊道春海先生がいつも真ん中で、今では信じられませんが西川先生は中央にはおらず、常に端の後ろの方にいらっしました。その後、「書品」で清朝書学の書を紹介していく中、自らも書作品を制作していく過程で次第に意識をお変えになって、篆書隸書などの新しい発掘資料を作品に取り入れることで書壇において台頭して参ります。これが明清派、碑学派でございます。

(4) 文人派

それからこれは新しいと言うわけではありませんが、明清代の文人的な生き方を理想とする文人派として平尾孤往先生（1903～1979）、津金霍仙先生（1900～1960）があげられます。当時、文人系の象徴として平尾孤往先生は熱狂的な人氣が在り、背筋をきちんと伸ばして歩く姿や髪型を真似る人まで出てくるほどの存在でした。青山杉雨先生（1912～1993）とはまた違った意味でお洒落で、何時も背広を着ていらっしました。

〔現代系〕(1) 前衛（墨象）派

一方、現代系は前衛派として世界の抽象表現主義にしたがい、書を連携していく事になります。これは絵画の歴史を勉強された方はすぐに分かるかと思いますが、写真が登場してから、それまでの宮廷画家

は写實的に描く傾向が流行します。そうすると画家の仕事は一体何だろうという考えも生まれ、外形を忠実に写すことが本当の絵画でなく、人間の心の中にある心象を写すのが本当の絵画ではないか、という考え方が台頭してきます。そこでピカソなどの画家が出てくるわけです。書の世界は最初から心象を表現する芸術ですから、とても近い関係にあるという考えが生まれてきます。そこで上田桑鳩先生（1899～1968）や大澤雅休先生（1890～1953）などが中心に盛り上がって参ります。

(2) 新感覚派

また、手島右卿先生（1901～1987）をなぜ新感覚派として別にしたかと言いますと、昭和32年にサンパウロビエンナーレ（現代芸術のエキシビション）がありまして、東京の国立近代美術館が中心になり作家を選びました。その時に井上有一先生（1916～1985）と手島右卿先生が選ばれました。その時、手島右卿先生は「私は前衛（墨象）派ではない、新感覚派である」とおっしゃいました。要するにご時世から離れた仕事はしないと言うことです。当時、第一人者の豊道春海先生が「文字を書かない書は書ではない」ということで一緒に仕事はしないと言い、当時日展では上田桑鳩先生の作品の文字性をめぐって揉めることがありました。当時は、毎日書道展も毎日前衛書展と分けて開催していました。

(3) 近代詩文派

また一方、金子鷗亭先生は「近代詩文書」（漢字書法を中心とした現代文を素材にした作品制作）、飯島春敬先生（1906～1996）は「新書芸」（現代詩を素材として作品制作を提唱）、石橋犀水先生は「新和様」（漢字かな交じり書）、津金雀仙先生は「昭和体」（漢

字かな交じり書）とそれぞれ書風を確立していきます。これは、太玄会にも大きく関係してくるわけですが、戦後、大衆社会になり、漢詩漢文がだんだん読めなくなり、変体仮名を使う作品もだんだん読めなくなってしまう。そこで書は言葉を発信する芸術であるので、何とか文学と共存していきたいという考え方が出てきます。これが近代詩文や新書芸、独立では現代文体としてあらわれてきます。

(4) 大字かな

大字かなは、昭和20年代に尾上柴舟先生が日展の仮名の中心的存在であった頃、粘葉本和漢朗詠集が絶対的なもので、これ以外は評価されないというムードがありました。また、関西では早くから日展に大字仮名を出したいという空気がありました。当時の東京都美術館は、中庭がありその後方に旧工芸室がありました。幹部の作品は前方の明るい所に展示されていましたが、帖や卷子は工芸用の陳列ケースを拝借して展示されていました。しかし、今のように明るく照明が照らされるような事はありませんでしたので、どうしても暗いイメージになってしまいます。自分たちの仮名の作品も堂々と壁面に飾ってもらいたい、そういう思いから大字仮名が盛んに推進されることになりました。昭和24年に内田鶴雲先生（1898～1978）が特選に受賞されますが、その後大字仮名が流行るようになっていきます。

4 書学の研究

その時の太玄会は、伝統系というか、中庸系だったと思いますが、仲良しクラブという傾向もありましたが、審査となれば10数団体が集まっていますので、そこでの軋轢は起こるわけです。そんな時期がだいぶ長く続きました。そこで太玄会書展の第12回展では、若手の人た

ちから日展にも繋がらないし、仲良しクラブだけでは困るということで大きな改革を行っています。そこで、新世代というか中堅層が指導権を持って運営していこうということになるわけです。和の精神だけでは変わらないということで、当時の先生方は相当悩まれたと思います。その結果、田中鳳柳先生が会長の頃、きちんと勉強して研究を深めた根拠のある作品を発表すること、第1室の作品形式も2×8作品だけが並ぶようなことではなく、いろいろな形式の作品を展示していくこと、その中でもう一度勉強をし直して太玄会の新しい形式を作っていこうという動きが出てきました。たとえば、第55回記念展の時に特別展示をした際、楊見、何紹基、王鐸、趙之謙、呉昌碩などの名品を陳列し、講演にも高木聖雨先生をお招きするなど、他の団体とのつながりを持つことで新しい勉強をしていこうと試んでいます。田中鳳柳先生は今やコレクションでは書道界で非常に有名ですが、お持ちの作品を展示して勉強の機会を設けるなど、多くの人たちに見ていただくチャンスを作ろうと努力されています。それから、太玄会の参加団体がそれぞれと質を向上させようという動きも出てきています。例えば、書星会是一个の例ですが、日展や読売書法展では2×8の作品が並ぶ中、書星会展では様々な作品が並んでいるのを見ると二重人格ではないかと思われるくらい、よくあのように書き分けられるなど思うくらいバラエティーに富んでいます。入口に六尺屏風が並び、その奥には8尺×12尺の超大作や10mほどの巻子が展開されるなど、工夫をされています。また、梅原清山先生は青山杉雨先生から碑学的な考えを持ち込み、それを西村東軒先生が引き継いでいます。このように書風の上でも新しい革新が行われているわけです。

そして太玄会は、読売、毎日、産経と主流の中に存在しているので

す。これはどういう事かという、あらゆる情報が入ってくることなわけです。これを生かしていくことが大切だと思います。関西でいろいろ訪ねていると、ほとんど関東の書は謙慎というイメージがあります。毎日から読売へ多くの団体が移りましたが、関西にとって関東の情報はそのごく少なくなっています。その中で読売、毎日、産経のそれぞれの異なる考え方が所属していることは是非とも生かして欲しいと思うわけです。

5. 社会性への対応と課題

それから大問題で難しい事です、中国では若い方でも漢詩をきちんと読めますね。これは自国語だからと言えますが、私たちが源氏物語を何とかかじるくらい位に彼らも古典詩も何とか理解できます。でも、一般社会では日展とかで漢字作品の前に立つと漢字の作品はちんぷんかんぷんです。漢字作品を見た時に読めないというのは困ることなのです。書は言葉を発信する芸術ですが、それを捨ててしまつて造形だけで取り組もうとすると、将来非常に厳しい状況になっていくと思います。これは書道界だけの問題だけでなく、日本が戦後の大衆社会になったことがもろに影響を受けていると言えるでしょう。なかなか書道界だけで解決していける問題ではありませんし、高貴な芸術としては残るかも知れませんが、大衆社会に対応していかない限り、大衆の中で基盤を作らないと芸術としてこれから大変難しくなっていくのではと考えます。そのためにも書家自身が言葉を発信していく事を考えていかないといけないと思いますが、これを古典との関係で考えると中々難しいかもしれません。どうやって高貴な書法で現代文を表現できるか、これを考えていくことこそ書道界が生き残っていく事に

なると思います。まず、若い人が入ってくるようにするためにどうしたらよいか、古典の勉強、漢字系仮名系で今の自分の気持ちをどのよう
に伝えるか、皆さんも考えていただければと思います。

ある中国の知り合いが「日本人は不思議ですね。何で唐代の古くさい漢詩の作り方を勉強するのでしょうか。私は日本の方と付き合う時は唐代の作り方で漢詩は作りますが、でも考えると不思議なことですね。」と言うのです。日本人は、返り点を使って漢詩を読むという要素があります。ただ一般社会では通用しなくなっていることもあるわけです。また頭から詩を読んでいけば問題は起きないのですが、日本人は返り点で読み返すものですからよく脱字をしていますね。これをどうしたら良いですかね。これは太玄会だけの問題ではないのですが、これからの日本の書道をどうしていきたいか最大の問題だと思います。とにかく現状は将来に向かって非常に厳しい状態であることは間違いありません。

6 少子高齢化社会の対応

それと、これはもつと大きい問題が日本の人口構造の問題です。先日「墨」の中の「小さな視点」でも掲載しましたが、余り正面から取り上げるとショックが大きいかと思いますが、2025問題とも言いますが、戦後の団塊の世代（現在65歳前後）があと10年経つと75歳になり、大学教授もみな引退することになります。現在も各団体は年配の方が主導権を担って運営しています。そういう方たちが10年後にはだんだん引退していきます。今、若手と言われていた新世代の方々がみんな75歳以上になってしまふのです。この時代にどうやって書道団体を維持していくのか。戦後の書道界は公募展を中心に社会構造を

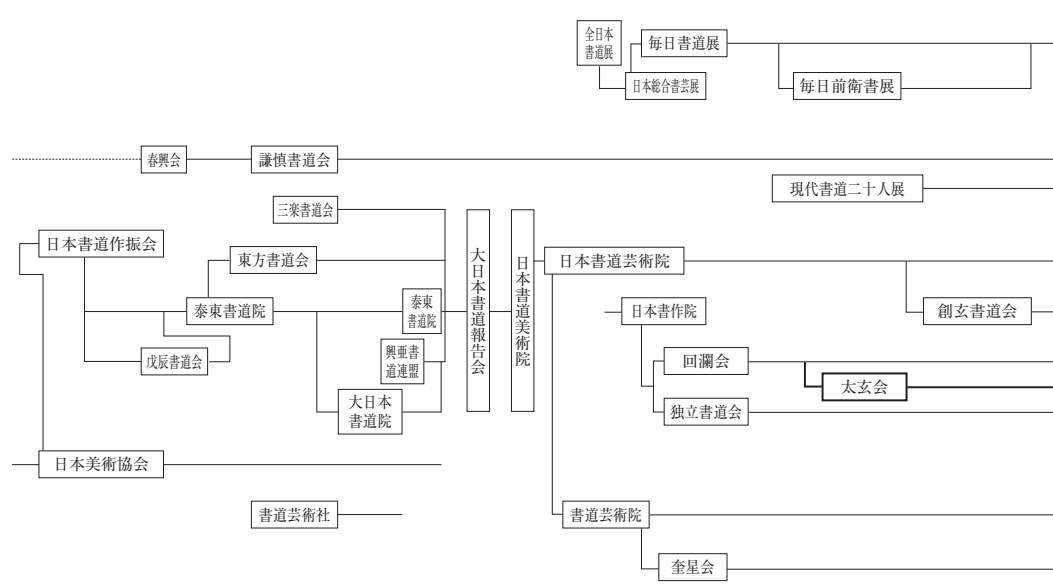
作ってきましたが、これがピンチになってくるわけです。書は残っても書壇という構造が、これからどうなるか非常に厳しい状況になってきます。また、書道界だけで考えるとまだ大丈夫と考えるかもしれませんが、文学の世界で見ると、一時代前の文壇は徒弟制度の中で厳しい修行を積んで作家が出てきたわけです。ところが今では文壇はありません。でも文学は今でもきちんと残っています。書道界も次第にそういう時代に近づいてくる可能性もある中、どう対応していけば良いか。これは日本書道連盟をはじめ総力をあげて取り組まないといけない問題だと思います。もちろん書だけ残れば良いという考えもありますが、一方、生活基盤に関わる問題でもあります。書家の生活も非常に厳しいし、出版業界や文房具を作っている業者ももっと厳しくなっていくと思われます。こういう事にどのように対処していったら良いか、今から太玄会の皆さんにも真剣に取り組んでいただきたいと思います。

長時間にわたりご清聴ありがとうございました。

※講演後、質疑応答、田宮文平先生執筆の書籍の抽選会をもって終了した。

近代・現代 書団体の成立とその変遷

西暦1900	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69								
和 暦	大 正					昭 和																																																	
	12	13	14	15	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44							
芸術院会員																尾上柴舟																																							
																																														豊道春海									
																比田井天来																																							
																																																			川村驥山				
日 展	(1919～1935) 帝国美術院展覧会（帝展）										(1936～1944) 文部省美術展覧会（新文展）												(昭和21～) 日本美術展覧会（日展）										(昭和23) 第五科として書部門が加わる										(昭和33～) 新日展												
											※ (1907～1918) 文部省美術展覧会（初期文展）																																												



主な書道団体

No.	団体名	結成年		提唱者・発起人、経緯等
		西暦	和暦	
1	日本美術協会	1887	明治20	1879(明治12)年に結成された龍池会を前身とし、当時の宮内省との関係を深め伝統絵画の保存を指針に明治20年に結成。 ※明治20年から昭和22年まで宮内省が運営する優秀な美術科・工芸家への顕彰制度に「帝室技芸員」があった。その後、文化勲章、重要無形文化財、あるいは日本芸術院会員へと引き継がれる。また、明治17年に龍池会から分離し「鑑画会」を発足、明治20年の東京美術学校の設立へと到る。
2	日本書道作振会	1924	大正13	豊道春海(当時、ほとんどの書家を結集)
3	戊辰書道会	1928	昭和3	※2から独立 長谷川流石、川谷尚亭、吉田苞竹、高塚竹堂、田代秋鶴、松本芳翠、佐分移山、鈴木翠軒。
4	春興会	1928	昭和3	豊道春海、西川寧、(※昭和8年、西川寧・青山杉雨等により謙慎書道会を設立)
5	泰東書道院	1930	昭和5	※2と3が統合。豊道春海、尾上柴舟、大池晴嵐、江川碧潭、林 祖洞、西川 寧
6	東方書道院	1932	昭和7	※5から独立。高塚竹堂、河合荃廬、吉田苞竹、松本芳翠、辻本史邑、川村驥山、松井如流、平尾孤往
7	書道芸術社	1933	昭和8	上田桑鳩
8	三楽書道会	1934	昭和9	若海方舟、磯野学申、中村素堂

第五十七回 太玄会書展日程表

											28 1	年月
25	24	23	22	21	20	19	17	16	15	14	13	日
月	日	土	金	木	水	火	日	土	金	木	水	曜
搬 出	祝 授 作 最 賀 賞 品 終 会 式 撤 日				開 会	陳 列	予 備 日	予 備 日	鑑 別・審 査	會 員賞選 考	搬 入	作 業 内 容
10 :00 ～ 12 :00	18 :00 ～ 16 :30	9 :30 ～ 15 :00	〃	〃	〃	9 :30 ～ 17 :30	11 :00 ～		〃	11 :00 ～	10 :00 ～ 12 :00	時 間
都 美 搬 入 室	精 養 軒	〃	〃	〃	〃	都 美 展 示 室			〃	都 美 審 査 室	都 美 搬 入 室	會 場
搬 出 入 部	祝 褒 渉 賀 賞 外 会 會 接 部 部 待 部 部 部	陳 列 〃	〃	〃	〃	會 場 當 番	陳 列 部		〃	審 査 事 務 部	搬 出 入 部	擔 當 部

第五十七回 太玄会書展役員及び各部部長

名誉顧問	梅原清山	理事・総務	石井光華
常任顧問	福田丞洲	理事・総務	石島廻山
常任顧問	田中鳳柳	理事・総務	遠藤有翠
会長	笠原聖雲	理事・総務	木全珠香
副会長	垣内楊石	理事・総務	葛原清峰
副会長	石川流芳	監事	高橋心行
董事	佐渡壽峰	監事	中田珪川
董事	春藤大耿		
理事長	西村東軒	會計部長	下谷蘊雪
副理事長	落野雅宣	事業部長	落野祐涯
副理事長	小原天簫	広報部長	荒井湧山
副理事長	宮負丁香	渉外接待部長	石井蕙園
事務局長	金丸鬼山	図録部長	伊藤慈恩
理事	鈴木暎華	搬出入部長	稗田影風
理事	瀧沢曲峰	審査事務部長	飛田冲曠
副事務局長	伊東玲翠	陳列部長	大場大幹
副事務局長	江原見山	褒賞部長	小泉興起
副事務局長	伊場英白	祝賀会部長	大河原由佳
副事務局長	小出聖州		

第五十七回 太玄会書展入賞入選者

理事の部

太玄大賞(五十音順)

新井清玉(真仙) 石井珠翠(書星) 大窪昇鶴(書人)

堀越壽崑(燎原)

審査会員の部

太玄賞(五十音順)

大竹伯燿(菅菰) 川本景月(書星) 佐藤北峰(真仙)

瀬下綾影(書人) 段野裕子(書王)

全日本書道連盟賞(五十音順)

板倉建昇(書星) 小野敏之(高友) 嘉門瑤泉(九龍)

川上白鳳(真仙) 関根暁香(研友)

会員の部

特別賞(五十音順)

下原春美(書王) 高木帝月(九龍) 成澤攝艶(書星)

西沢薫風(真仙) 望月俊邦(書人)

奨励賞(五十音順)

赤木美那(真仙) 天寺雅良(高友) 石川翠鈴(九龍)

石山松香(高友) 内山了亭(真仙) 太田翠華(書星)

岡本琴玉(燎原) 影山文奈(青龍) 川島香竟(書星)
川名僊苑(書星) 北嶋蘆園(九龍) 小山君代(書王)
篠原一風(真仙) 高島泉遙(書人) 滝聖月(高友)
龍口紫苑(真仙) 露木舞(菅菰) 廣田蓬雲(九龍)
藤伸明(書星) 松井華雪(書人) 松山翠苑(九龍)
守田薜霞(燎原) 柳沢桑風(真仙)

会員新人賞(五十音順)

赤羽根桂樹(真仙) 荒井珠鶴(燎原) 一万田慶舟(真仙)
北村如雲(九龍) 國松都佼(書星) 佐藤美苗(九龍)
島田峰覧(書人) 菅谷聳山(書星) 高橋登紀(高友)
塚田恵子(書王) 寺澤紀芳(真仙) 中島翠霽(書人)
宮下香嶺(九龍) 森田芳祥(高友) 山口杏園(菅菰)
吉田翠苑(書研)

準会員の部

推薦(五十音順)

池田芳翠 伊東紫艶 遠藤昌運 小川爽歩
小野凌水 加賀谷浪子 垣内楊玄 加藤千鶴
釜田響 小谷香拓 小林宗朝 小山萌生
佐藤美佐 杉山葉子 関谷白瑤 相馬蘭香
時田大祥 原田兆祥 横山陵風

準推薦(五十音順)

相原莖艶 江口桂水 江澤とし子 遠藤桃葉

大須賀竹仙	小川美笙	尾崎清爽	小俣柏翠
菅野照子	菊地梨祥	木津純子	京増瑞葩
小菅啓子	佐久間輝珠	櫻井碩翠	佐々木華瑤
佐藤紫泉	篠原翠春	菅祥真	鈴木竹園
鈴木万深	高野秀影	高橋朗山	田島由美子
田邊溪祥	玉井思醉	中村柳華	名富月美
西岡山州	畠山靜枝	卷島清麗	宮地豊苑
村山霜紅	山形翠簾	山田香雪	吉田庭鳳
渡辺高峰			

公募の部

特選 (五十音順)

青木爽游	浅田広樹	安藤幸輝	石井茜音
石田正道	岩渕福仙	印南醉豊	上野桂尚
右近桜月	内田正子	小澤雲峰	川井韶瑞
岸美津子	北原靖子	佐々木玉峰	島津則子
鈴木麻美	鈴木光鶴	高橋玉泉	高橋弘雲
玉村華堂	中澤桂琇	藤田晶洋	細測金杏
本間直人	増井紅翠	増田澄靖	松本娟秀
宮澤溪翠	渡辺仁美		

準特選 (五十音順)			
阿部弘信	飯島綾花	石川清香	石川未来
伊藤桂子	伊藤幹夫	稲生妙子	猪又千穂

入選 (五十音順)

上野沙耶花	牛口仙桃	内田黄鳥	大河原佳子
大野遙佳	大場青峰	岡山旭洋	奥田叔仙
垣内仁美	片倉幸	方波見早子	加藤暉川
鎌形美容	川端紫雲	久保田溪堂	栗原紫翠
黒田真弓	毛塚佳泉	古賀輝煌	小暮兆琳
小山千翔	坂智大	佐々木清美	佐藤摂子
佐藤蒼艶	佐野富雄	猿田浩子	沢田信桐
志村幸子	下間明燈	莊保浩子	鈴村早秀
高橋希兆	高橋蒼功	滝口栄珠	田嶋慎仙
田中元光	角田輝響	手川翠鶴	東方陽周
中桐麻稀	中村丹裳	中元玉蘭	中山志峰
奈良京華	西村果仙	二瓶花僊	葩島召泉
馬場春蘭	原田青翠	日色咲麗子	深野幾与子
福岡華泉	福塚光徳	藤原博子	増田玲子
松井芙蓉	宮川彩波	宮本祥太	森沢萌翠
守田禎香	山井奈々子	山口政行	山田光艶
吉田愛	渡部富久栄		

荒井逢月	新井美帆	荒原香堂	有馬優菜
石井鏡子	石井梅香	石井宗子	石川惺楓
石川青流	石川知重	石原涼音	井出清玉
稲木芳華	井上紀秀	植竹美帆	薄木兼子
浦崎明美	瓜田余響	江上桐佳	榎本輝映
太田君江	大谷文華	大塚美代子	大森栄芳

夏目 惠	長尾 和香	豊嶋勇太郎	寺岡 恵風	段野 真希	田中 幸子	武山 麻美	高橋 蘭花	高橋 越雲	仙石 良子	鈴木 光濟	末永 美和	島田 昌光	椎 霞扇	佐藤 保恵	櫻田 明道	斉藤 光天	小林 富子	小池 礼凌	熊谷 弘	神田 絹香	勝畑喜一郎	尾和 恵扇	小川 悦雄	大山 紫彩
並木 榮楽	中込 雅恵	豊田 光暁	寺崎登美子	辻子 遊山	谷 俊子	田中さち子	竹中 光順	高橋 翠嶺	蘭田 紫苑	鈴木 教子	菅沙 矢香	清水 享鶴	篠崎 文江	佐藤 良枝	佐々木芳華	齋藤 天聰	小林和可奈	小泉 文代	倉持 昌世	木下 正覚	川井 右京	鹿島 由美	小澤 洋子	岡田 信来
西方 勇玟	中山 加津美	豊田 浩美	遠山 陽江	津山 紫陽	玉井 香敬	田中 春曄	竹淵 晃	高橋 貞松	高内 芝蘭	鈴木 白明	杉山 雅子	下間 果穂	柴田 悦子	眞田 星鳥	佐藤 榮壽	坂 貴大	小森カズエ	後藤 詩織	倉持 麗子	木村 兆覚	川島 遙青	数本 慈雨	小野 翠香	岡本 美佳
西澤 緑風	南雲 鷺草	鳥海 佳奈	徳永 慈峽	手塚 恵翠	田村 游古	田中多加代	竹本 萩嶺	高橋 幸江	高野 房江	須藤 隆史	鈴木 輝澄	下原 春樹	柴田 蕙華	沢田 宏子	佐藤 新子	櫻井美津枝	児山 九聲	後藤 紀子	栗本 暁	草間 清晨	川谷 淳一	片山 廣楓	小野田子雪	小川 兆史

渡辺 佳祥	若麻績弘道	吉田 直美	山本 宣子	山田 桂子	柳澤 幸子	水吉 福子	松村 祥風	増田 兆穂	本間 祥雲	古川 紫虹	藤田 靄香	福田 佳子	平田 光空	長谷川 洸春	西端 茂
	涌井 雅舟	吉野 裕子	山本麻璃菜	山田 緑水	矢野 松翠	御田村洋子	丸山 兆基	松尾 滋厚	牧野 博子	古谷 幸子	藤田 寿仙	福本 澄鮮	平野 渚秋	林 葵丘	西山 由苑
	和田 光翠	米倉喜美代	横瀬 晃子	山田 緑亭	山内 聡華	宮山 美和子	三浦 道子	松沢 上清	舛田 昌玄	堀井 幹子	藤原 桂子	福本 明暢	広沢 光香	林 苺艶	根本 恵和
	渡邊 絵里	若麻績實豊	横田 香苑	山本伊夫子	山浦 柚美	宗島 余光	三木 智花	松野 弘範	増田 千鶴	本間 雅鳳	藤原 芳苑	藤崎 澄瑩	深川 兆瑤	膝 附史穂	根本 由紀

第57回 太玄会書展 会場・講演会風景

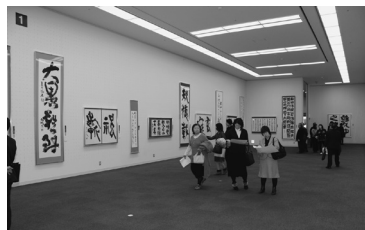
平成28年1月20日(水)～24日(日) 会場：東京都美術館



日展理事 星弘道先生来賓ご来場



第一室風景



満席の講演会場



講演「落款印」—種類と押し方—
講師：河野 隆 先生



様々な印材



押印に関する資料の展示



資料を鑑賞する聴講者

作品解説と席上揮毫



小出聖州先生



宮負丁香先生



西村東軒先生



落野雅宣先生



垣内楊石先生



石川流芳先生



小原天簫先生



飛田冲曠先生



瀧沢曲峰先生



伊場英白先生(中央)



大場大幹先生



金丸鬼山先生



荒井湧山先生



江原見山先生

第57回 太玄会書展 審査風景

平成28年 1月14日(木)～15日(金) 会場:東京都美術館



審査2日目



審査1日目



当番審査員



会員賞選考委員

第57回 太玄会書展 授賞式・祝賀会

平成28年 1月24日(日) 会場：上野精養軒

授賞式



審査報告
審査事務部長 山村鳳雨先生



開会の辞
副理事長 落野雅宣先生



理事長挨拶
西村東軒先生



会長挨拶
笠原聖雲先生



太玄大賞受賞者



本年度審査員



運営委員



閉会の辞
副理事長 小原天簫先生



授賞式の風景



太玄賞受賞者

祝賀会



祝賀会風景



乾杯の発声
読売書法会事務局長 山崎俊滋様



来賓挨拶
日展理事 星弘道先生



開会の辞
副会長 石川流芳先生



閉会の辞
副会長 垣内楊石先生



祝賀会風景



第五十七回太玄会書展

謝 辞



受賞者代表 書星会 石井 珠 翠

第五十七回太玄会書展に於きまして私のような若輩者が図らずもこのような榮譽ある賞を受ける事になり、感激でいっぱいでございます。受賞者を代表致しまして、謝辞を述べさせていただきます。

本日、私どもにこのような盛大な授賞式を催して頂き誠に身の余る光榮で厚く御礼を申し上げます。今日まで書道が続けることが出来ましたのも、諸先生方ご指導と一緒に学ぶ書友があつての事と改めて感謝申し上げます。

また、太玄会という集合団体で他社中の先生方、先輩方からも多くの事を教えて頂いております。今まで書を通して学んだ

事に感謝の気持ちを持ち、太玄大賞の名に恥じぬよう、今日を新たな出発の日とし、より一層精進する所存でございます。まだまだ若輩者でございますので、今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

むすびに、太玄会の益々のご発展と先生方はじめ皆様方のご健勝をお祈り申し上げ、僭越ではございますが、受賞者を代表してお礼の言葉とさせていただきます。

平成二十八年一月二十四日

太玄会所属団体のこの一年の活動

書星会

第63回書星展

会期 平成27年8月12日(水)～20日(木)
会場 東京都美術館
代表者 宮負 丁香

一室に指名された作家の大作、屏風、10m巻子を展示し、書星会の今を見ていただきました。

今年は毎日行なわれる作品解説会に加え、新企画として会期中三回の席上揮毫を試みました。先生方の書く様子を見ることができ大変勉強になったとの見学者の声でした。来年も引き続き行なう予定でいます。お暑い中御参観いただき有り難うございました。



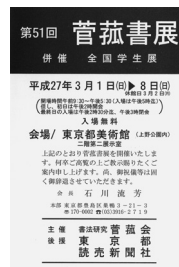
菅菰会

第51回菅菰書展 併催全国学生展

会期 平成27年3月1日(日)～8日(日)
会場 東京都美術館
代表者 石川流芳

早春の上野での展覧会を、今年も東京都美術館で開催することが出来、充実した一週間でした。昨年50回という節目の記念展を終え、新たなスタートという気持ちで、出品者一同一年間の研究成果を発表することが出来ました。

併催の学生展も会場の雰囲気明るくし、多くの来館者で賑わいました。



書王社

条幅研究会

会 期 平成26年10月25日(土)
会 場 神奈川県立武道館
代表者 鈴木 映華

神奈川県立武道館での二回目の書王社条幅研究会が開催されました。条幅を書くのは初めてと云う方から上級者まで34名の参加者です。

広々とした大剣道場で思い思いの場所に道具を広げ、楷、行、草書で書かれた二種の課題に取り組みました。代表の鈴木映華先生が体調を崩され欠席となり、残念ながらご指導はいただけませんでした。書き上げた作品の前で記念写真を撮り、楽しく有意義な勉強の場となりました。

鈴木景堂遺墨作品展

併催2015書王社選抜展
会 期 平成27年7月14日(火)～7月19日(日)
会 場 東京銀座画廊・美術館8階
代表者 鈴木 映華



生涯、個展をすることがなかった鈴木景堂先生の遺墨作品展を先生が好きだった銀座にて、書王社選抜展併催で開催しました。小品から大作まで、書簡の卷子、扇面、団扇も含めての84点は圧巻でした。バラエティにとんだ作品群には賞賛の声が挙がりました。控え目に半紙サイズ以下に抑えた書王社選抜展作品も好評でした。

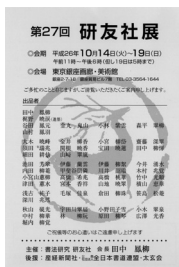
研友社

第27回研友社展

会 期 平成26年10月14日(火)～19日(日)
会 場 東京銀座画廊・美術館
代表者 田中 鳳柳

今年の会場には「文彭」（文徵明の長男）と「呉昌碩」の特徴ある扇面が比較対称的に陳列され、会場の格調を高めていました。また、色とりどりの秋の野草が壁面数箇所には飾られ、会員一人一人の一年間の研鑽の成果を後押ししていました。

会期内には、産経新聞社の熊坂社長をはじめ、太玄会の多くの先生方に御来場、御高覧頂き、更なる書作への励みとすることができました。



研修旅行

会 期 平成26年11月9日(日)
会 場 奥多摩めぐり(吉川英治・川合玉堂美術館等)

絶好の紅葉狩りの時期に会員の親睦をかねた研修旅行を実施しました。

参加者は、33名とバス1台をゆったり使った旅で、川合玉堂の伝統的な日本画や吉川英治の色紙など作品の数々を鑑賞することができました。

帰路には酒造元に立寄ることもでき、楽しい一日でした。

書作錬成会(春・夏)

会 期 平成27年3月22日(日)・7月19日(日)
会 場 浦和鷺毛堂錬成会場



春の錬成会は、産経国際書展に向けて、夏の錬成会は、研友社展、太玄会に向けての錬成です。

いずれの会においても、田中鳳柳先生直々の指導を受けることができ、会員の技量向上と相互信頼感の醸成に貢献しています。

真仙会

第49回真仙会書道展

会 期 平成27年5月8日(金)～13日(水)
会 場 ながの東急百貨店シエルシェ5階ホール
代表者 小出 聖 洲

第49回真仙会書道展は5月8日から13日までの6日間、ながの東急百貨店で開かれた。

今回は174点が出品されました。作品を直接見に来たり、百貨店に買い物に来た人が会場を訪れ期間中にぎわいました。

併せて行われた学童展は340点が展示されました。この表彰式は10日の午後から真仙会展会場で行われ、真仙会賞に輝いた15人と金銀銅に輝いた代表一人ひとりに賞状が手渡されました。



学童展で入選、入賞した代表の児童



兄弟や父兄の方々が多く出席された表彰式

鳥跡会

歌の会

第22回歌の会書作展

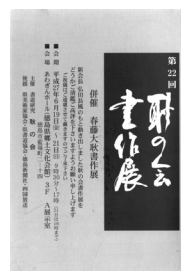
会期 平成27年6月19日(金)～21日(日)

会場 あわぎんホール

(徳島県郷土文化会館) 3F A展示室

代表者 弘田 長風

今年で22回目となった歌の風書作展は、会員32名が59点の作品を展示しました。蘭亭序・蜀素帖などの臨書や漢字・調和体の作品を会員の錬成の成果として発表しました。又、春藤大歌書作展の作品16点を併催しました。バラエティ豊かで、楽しい展覧と好評でした。



書研社

第35回記念書研社展

会期 平成27年2月27日(金)～3月1日(日)

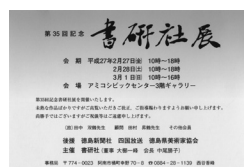
会場 徳島市シビックセンター・ギャラリー

代表者 中尾 勝子

書研社は田中双鶴先生が昭和51年に徳島大学教授を退官された年に創設された。

第20回展の時体調を崩され他界。二代目会長を近藤静苑氏が、現在三代目会長を中尾勝子が務めている。

毎年5月に定期総会を開き年間スケジュールに従って月1回の錬成会を実施。今回31名の会員が61点の作品を出品。記念展ということで双鶴先生の作品を7点展示した。漢字、仮名、調和体、篆刻、臨書等バラエティーに富んだ展覧会となった。



書道研究一心会

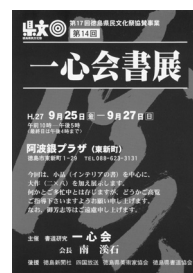
第14回一心会書展

会期 平成27年9月25日(金)～27日(日)

会場 阿波銀プラザ

(徳島市東新町二丁目)

代表者 南 溪石



本年度の一心会書展は、家庭の室内に飾る小品(インテリアの書)として、半紙から半折 $\frac{1}{2}$ 程度の書を中心に、大作(2×8)を加えた展示を試みました。

会場にうまく効果的に展示できるかなど、少し不安はありましたが、なんとか総計60点を展示することができました。

漢字作品を中心に調和体、仮名作品をまじえた書展です。

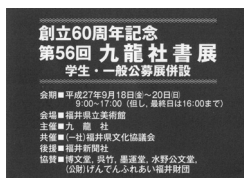
九龍社

九龍社宿泊研修

会期 平成27年8月22日(土)～23日(日)

会場 すかっとランド九頭竜

代表者 垣内 楊石



年6回の研修会、唯一の宿泊研修会は本年も九龍社の名に縁のある九頭竜川を眺望できる会場にて開催された。

臨書研究会、エネルギーに関する講演等、太玄会展にむけて会員は熱心に研鑽に励んでいました。

創立60周年記念 第56回九龍社書展

会期 平成27年9月18日(金)～20日(日)

会場 福井県立美術館

代表者 垣内 楊石

今年度の九龍社書展は、九龍社創立60周年記念の年に当たり、作品集の発行、記念式典等企画され、節目の年となりました。

会員97名の作品を始めとし、公募作品、学童の競書作品展も併設されていて、表彰式には親子連れの観賞者で会場也大いに賑いました。



書研社

第39回書研社展

会期 平成27年9月22日(火)～27日(日)
会場 大黒屋ギャラリー(7階)
代表者 植木蒼穹



代表植木蒼穹を中心に、臨書作品2点を含め、総計32点が並ぶ。秋晴れにも恵まれ多くの御来駕を賜わり、実り多い39回展となりました。多岐にわたり御指導・御高評を戴きましたこと、感謝申し上げます。

来年は第40回記念展を迎えますので、会員一同企画案を練っております。是非御来場下さいませ。

鍊成会

会期 平成27年6月27日(日)
会場 仲町会館
代表者 植木蒼穹

今回は、作品づくりの為の鍊成会ではなく「筆遣いを学ぶ」をテーマに、席書形式で、書きあい、学びあいました。



第39回 書研社展

ご清覧のうえ、ご高評賜りたく御覧内申し上げます。
会期 平成27年9月22日(火)～9月27日(日)
会場 大黒屋ギャラリー(7階)
代表者 植木蒼穹

運筆の遅速や、潤渇への導き方等々に渡り、意見交換をし充実した鍊成会となりました。

書人社

第27回書人社選抜展

会期 平成27年4月9日(木)～12日(日)
会場 セントラルミュージアム銀座
(紙パルプ会館5F)
代表者 梅原清山

作品は6平方尺以内の作品に決めています。作風は各自にまかせるが書風書体がバラエティに富むことを極力奨励しています。



第二十七回
書人社選抜展

第27回書人社選抜展を下記の通り開催いたします。
ご高覧賜り、ご批評ご指示をお待ちしております。

●会期 平成27年4月9日(木)～12日(日)
会場 セントラルミュージアム銀座
(紙パルプ会館5F)

主催/書人社 書人社 梅原清山
後援/読者懇話会・公益財団法人日本書道連盟
協賛/玉置堂・高松堂・書道楽家

燎原社

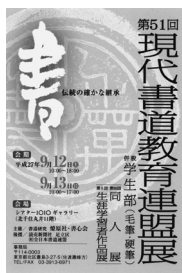
第51回現代書道教育連盟展

会期 平成27年9月12日(土)～13日(日)

会場 北千住丸井11階

シアター1010ギャラリ

代表者 佐渡壽峰



今まで年2回開催していた社中展を今年度より一つにまとめた初めての展覧会でした。例年3月開催していた同人展を併設した今展覧会は、大小作品が点在し変化に富んだのではないのでしょうか。

次年度の小作品課題を会場で投票、決定発表し、思いはすでに来年に向かっています。



平成28年度太玄会所属団体の活動予定

団体名	代表者	活動内容	開催日時	会場
燎原社	佐渡壽峰	第52回現代書道教育連盟展	9月10日(土)～9月11日(日)	北千住丸井11階シアター1010ギャラリ
青龍会	下谷穂雪	第46回青龍書展・学生書展併催	4月30日(土)～5月2日(月)	すみだリバーサイドホールギャラリ(墨田区役所1階)
高友社	落野雅宣	第8回合宿	8月28日(日)～29日(月)	ニューウェルシティ湯河原
		第38回高友社書展	4月15日(金)～19日(火)	上野の森美術館2階
書人社	梅原清山	第28回書人社選抜展	4月7日(木)～4月10日(日)	セントラルミュージアム銀座(紙バブル会馆5F)
書研社	植木蒼穹	第40回記念書研社展	9月20日(火)～9月25日(日)	大黒屋ギャラリ(6・7階)
九龍社	垣内楊石	九龍社宿泊研修会	未定	福井県立美術館
		第57回九龍社書展	未定	
鳥跡会	南溪石	第15回記念一心会書展	9月22日(木)～9月25日(日)	阿波銀プラザ(徳島市東新町一丁目)
	中尾勝子	第36回書研社展	3月4日(金)～3月6日(日)	徳島市シビックセンター・ギャラリ
	弘田長風	第23回歌の会書作展	4月7日(木)～4月9日(土)	徳島県立文学書道館ギャラリ
真仙会	小出聖洲	教養書道講座2回		
研友社	田中鳳柳	第28回研友社展書作錬成会	10月13日(火)～10月18日(日) 3月20日(日)・7月17日(日)	東京銀座画廊・美術館 浦和鷺毛堂錬成会場
書王社	鈴木暁華	未定		
菅菰会	石川流芳	第52回菅菰書展併催全国学生展	3月2日(水)～3月8日(火)	東京都美術館
書星会	宮負丁香	第64回書星展	8月12日(金)～8月20日(土)	東京都美術館

日々おもうちこと



山 本 白 鷗

ここ北陸越前地方は、連日好天に恵まれ幸せを感じている。昔から怖いものと言えば、「地震、雷、火事、親父」といわれてきたが、近年、地震、雷は勿論、自然がなす台風、津波、竜巻等はスケールも大きく、火事は必ず死者が出ており悲しいかぎりである。毎日火を使っている私自身、身につまされる恐怖を感じている。新建材の使用だろうか、家屋の構造の為なのか老婆心ながら悲しく思っている。又、最近、マンション等の建築時の建材による、くい打ち工事の違反問題等多く、色々先行きが心配だらけ……。

又、ここ最近の親父はやさしくなり、どのお父さんも私達時代の父と違い、温和で家族思い、一方では仕事熱心である。私個人で云えば、父の語録が沢山あり、まず、門限は八時、学歴より教養、鏡に向っていると顔より心をみがけ等、切りがない程ある。父は明治の人間だから学歴もなく、字はトイレの新聞にルビがついており(使用出来る大

きさに切ってたった)トイレでおぼえ、寝床で敷布団の上に指で字を書きおぼえたそう。そんな父だから私達姉妹には、読書、書道には理解があった。私自身も読書は勿論、書道が大好きで今日迄つづいている原点は父の教訓である。日頃、下手で悩みながら書いているが、私の師はなやむのがあたりまえで書は深く、書いても書いても満足はいかないのが当然といわれた。又、生徒、弟子に指導したら、必ず、自分の書にもどるよう練習せよ。臨書は一番の師である。と、この大切な師の教訓を胸にきざんでいる今日今頃である。

さて、本年度は身にあまる「太玄大賞」を頂き、師の恩恵もさることながら審査員先生方のおかげと一生の喜びになり、又、偶然にも、会場で舩添都知事様より、お誉めの御言葉をいただき、地方にいる私には一生忘れる事の出来ない思いとなった。老齢になっても夢を持ち、師の教訓、父の語録を忘れず、ここ越前富士をながめながら頑張ります。



「ことば」の力



柘植金鶏

私達のまわりには色々な情報が溢れている。その中に私なりの琴線にふれ「名言」と感じるキラリと光る「ことば」と出会うことが度々ある。朝日新聞朝刊に毎日掲載されている「折々のことば」周知の事と思うが私も愛読している一人である。NHKテレビで毎日曜日放送されている「新日曜美術館」書道を取り上げられることはあまりないが、どんなジャンルの芸術家の人達もその製作に対する思いを聞くと感銘や共感を覚える事がよくある。又、アスリート達のインタビューでも含蓄のあるコメントをしてくれることがある。書物の中は勿論宝庫だ。そんな珠玉の「ことば」は弱気になった時、迷った時、感情の整理がつかない時……色々な場面で私の指南役となり助言となり慰めとなり時には癒しとなり背中を押してくれることもある。

私の若い頃のモットーは「美しく枯れたい」だった。その為に今どう生きるか……。その一つとしてスポーツにも熱中していた。その時の仲間を通じて浅見喜舟先生を紹介していただく機会に恵まれ書屋会に入会し、書の道に入った。書の道とはどんな道なのかも知らずただ綺麗な字が書けるようになれば嬉しいくらいの軽い気持ちだった。

が、教わる事が何を聞いても初耳で、覚える事、調べる事ばかりだった。入口はあっても出口がみつからない深い道なのだとやがてわかった。そして色々な稽古事もスポーツもやめ書道に時間の多くを費すようになり、いつの間にか四十年近くが経った。「無我夢中の中にこそ人生の充実がある」。建築家安藤忠雄さんの言葉だ。四十年近くの間には子育てで大変な時期、親との別れ、家族や自分自身の病氣、色々な事があったが振り返ってみると、夢中になった書があったお陰で救われ乗りこえられ充実した年月であつたかと思うことができる。

「続けることは難しいが続けたことだけが自信につながる」誰の言葉かはわからないが、これは喜舟先生からいつも言われた「継続は力なり」に重なる。喜舟先生亡き後、故錦龍先生の御指導を受け、現在は宮負丁香先生にお世話になっている。すばらしい三人の師に恵まれ、巡り合えた幸せ、これも人生の充実かと思う。過日「新日曜美術館」で片岡球子さんを取りあげていて、ゲストの方が「球子さんはいつも『私はへたである。ほめられたことがない』と言われていたが、逆にそれが彼女のエネルギーになっていた」と話されていた。私の師も決してほめてはくれない。厳しい事を言われ、仲間同士で慰め合った事も一度や二度ではない。が、それはエネルギーを戴いたのだと考える事ができたら、そんなに落ち込まなくてもすみそうだ。次へのステツプになるかもしれない。「ほめられなくても自分の気のすむような仕事はしたいものだ」折々のことばからだ。精一杯努力して書かねば、と戒められた。「努力したからといって報われるわけではない。でも努力しなければ報われない」これはボクシングの村田諒太選手がオリンピックで金メダルに輝いた時、表彰式後のインタビューで話した言

業である。背筋がピンとなるようだ。謙虚な気持で向き合う大切さを思う。最近読んだ篠田桃紅さんの本の中にこんな一節があった。「毎日毎日紙を無駄にしています。時間も無駄にしています。しかしそれは無駄だったではないかもしれません。何も意識せず無駄にしていた時間が生きていたのかもしれない。」「新日曜美術館」で画家の方が「基本はスケッチです」と言われた。書道の基本は古典ですぐに結びつくかと思う。「欲が人間を成長させてくれる。欲がなくなったら終り」テレビ番組中から聞こえたコメントだが、今、屑籠に捨てた紙も無駄ではなく生かせることを信じて、もっと上手になりたいという欲と、人として成長したいという欲を捨てないで、古典の勉強を怠ることなく続けなさいとの声が聞こえた。

感謝

嶋田白染

昭和六十三年子育てが一段落し、自分の時間が持てる様になりました。子供の頃、習字教室に通っていた事が原点である、習い・教え互いに育つ書道。文部省認定師範免状取得に向け、再起始動をしたいと思っているときでございました。たまたま、師西村東軒先生の日展記事を見させて頂き、感銘を受け気が付いた時には、受話器を取り先生のもとに御連絡申し上げておりました。初めて電話をかけたにもかかわらず、親切丁寧に接していただいたことを今でも良く覚えております。その後、御指導して頂く事になり、師範試験に合格することが出来ました。取得後、社中の諸先輩が展覧会に向けて技量を申し努力

する姿を目にいたしました。自身も教える立場において、さらなる高みをめざそうと志をたて、一九九〇年第三十一回太玄展に初挑戦をし、行書作品で準特選を頂く事が出来ました。先生からはお祝いの電報を頂戴し、後の励みになりました。

その後多くの展覧会を観て、自分のめざす書を探している時でございました。一九七二年～四年にかけて発掘された長沙の馬王堆漢墓の帛書と出会います。多字数で書体は篆書から隸書に移る過渡期の様相を示す遺例として、書道史の上でも興味深いものでした。書風が自由で大胆で余っているから延ばしたんだという木簡の書き方に創作意欲をかきたてられました。目標となる古典と出会いめざす作品作りを始める事が出来る様になりました。現在は、中国・明時代の初期の詩人高啓の漢詩・約三百字を一字ずつ字書から集字し、草稿を作り、作品一枚に多様な表現で書いております。一枚書いては次はこう書こうと反省の繰り返しです。まよっている中、先生から「孫臏兵法」を参考にといつていただきました。そのつど献身的な御指導を頂いております。この様に今まで導いて頂きました師西村東軒先生に深く感謝申し上げます。

今後、日本の伝統である書を多くの人に発信していく太玄会が益々発展されますことをお祈りし、微力ながらお役に立てるよう精進して参ります。どうぞ今後とも御指導賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

編集後記

平成二十七年五月に開催された太玄会役員選拔展をもって、五〇年以上継続してきた役員展が幕を閉じました。出品にはこれまで太玄会を発足から支えてこられた大先輩の作品二十四点も展示されました。本展とこの役員展の開催により、書道界へ太玄会の存在を知っていただくと共に十五団体同志の相互理解と小品制作錬成の場として開催されてきましたが、これからは本展のみで世に問うこととなります。その分、本展への注目度も高まることを私たち会員は自覚して作品制作に取り組むことが大切だと感じました。

さて、会期中には田宮文平先生を講師にお迎えして、役員選拔展締めくくりにふさわしい「太玄会の過去・現在・未来へ」というテーマで講演を頂きました。戦後の書道界において書を愛し、己の書を信じ、そして書を人口に膾炙すべく、書に魂を注ぐ者たちの発露が時に和合し、時に背反しながら自分たちの立ち位置を求めていく姿は、地底から地殻の隙間を求め地上の火口へ向かって盛り上がるマグマのようなエネルギーを感じたのは私だけではなかったと思います。そのような時代に太玄会は昭和三十四年に結成されました。そして今年で五十七年目を迎えます。これまでの経緯は、特集の講演録を是非お読み頂ければと存じます。おしまいに今回の会報発行が、編集の都合上、年明けの四月となってしまう皆様に多大なるご迷惑をおかけしました。ここに深くお詫びを申し上げます。

平成二十八年三月

広報部長 荒井湧山

平成二十八年三月発行

太玄会報 第72号

発行者 太 玄 会

編集者 太玄会事務局広報部

制作 (株)風雅プランニング